
北国のプリマ

あすかK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北国のプリマ

【Nコード】

N8908X

【作者名】

あすかK

【あらすじ】

その世界は、四つの国に支配されていた。北国ラウグリア帝国は、皇室の治める国でありながら、ここ十数年戦が絶えず、軍人のはびこる軍国になりつつあった。東国との戦に勝利しその国土を占領し、西国との戦もますます激しさを増していく。そんな北国ラウグリアに生まれた、愛を知らない歌姫と、謎の多い女誑し准尉の物語。

序、生誕

人の住まう世界は、四つの国に支配されていた。ヤンム帝国、エウリア君主国、アズニー共和国、ラウグリア帝国の四カ国である。四つの国はそれぞれ位置している方角により、東国、西国、南国、北国と呼ばれた。少女は東西南北の四カ国のうち、最も北に位置する最も寒い国土にて、生まれた。

少女の父親は線の細い音楽家であった。庭を通り抜ける風、野良猫の欠伸、暖炉の火、氷柱から滴る水、ありとあらゆる音をこよなく愛し、自らも美しい旋律を生み出した。彼の作った曲は世界へ浸透するほどの勢いはなくとも、小さな劇場などに緩やかに根付いていた。誰を脅かすこともない優しい広まり方は、彼の作る音とも彼自身とも酷似していた。

それとは対照的なほどに、少女の母親は華々しい踊り子であった。舞台の上で光を浴びれば、鑑賞にきた客の目を引き決して離さない。彼女自身の生き様もその踊りに似て壮絶だったというが、少女を生んだ後、地方の豪族に雇われ姿を眩まし行方が知れない。父の手元に残されたのは、一輪の白い花。それは何の手がかりにもならなかった。父は必死で母のことを捜したが、ついにその痕跡を見つけることすら叶わなかった。母の存在を知る者は多いが、誰もがその実体を知らなかった。人々は声を揃える。

??あんなに美しく舞う女は他にいない。

人々が母について知っていたのは、その程度のことだけだ。そして、父が母について知っていたのも、その程度のことのみであった。

母を探すことをついに諦めた父は、細々と曲をつくるだけでは娘一人養うことも出来ないのだと気付き、娘を世話になっていた劇団の長に預け、軍隊に入隊した。やがて戦火が勢いを増したのはそれ

から間もなくのことであつた。父は軍隊に入つたきり、二度とは戻つてこなかった。少女の中の父親は、若い姿のまま老いることを知らない。せめて少しは娘に金銭を持たせてやろうと、父は財産の全てを売り払つてしまったために、形として父の存在を思い出させてくれるものすら少女には残されていなかった。

ただ、父親の書いた曲だけが、少女の手元に、耳に、心に残つた。それは少女の声を通して世界へと、微量ながら発信されていく。少女の声は異彩な輝きを放ち、たちまち有名になった。その声を武器に、彼女は生きていく術を手に入れるわけだが、それは両親が唯一少女に授けた宝物であり、特殊な『力』だったと言えるかもしれない。

1、歌姫フェリア

北国ラウグリアが隣国と戦を始め、そろそろ十三年の月日が経とうとしていた。領土を巡る国同士の規模の大きな喧嘩には、なかなか終止符が打たれない。時には剣を交え、時には話し合うこともありながら、解決の糸口は全く見出されていなかった。それどころか、問題はこじれていくばかりである。

それまで数百年に渡って穏やかだったというラウグリア帝国であるが、今では軍人ばかりのはびこる軍国になりつつあった。軍人は国で最も儲かる職種であるため、目指す者は後を絶たない。いつ死ぬともわからぬ職だと言うのにそれほどまでに人気があるのは、未だラウグリアの国内に戦火が飛ぶことがなかったためかもしれない。戦の凄惨さを目にすることのできない国内において、軍人というのは軍に属しているというだけで様々な優遇をされる羨ましい存在であった。

戦は国境付近か、あるいは遠い異国の地に広がっている。そのため最も国境から遠い首都エルヴァにおいてはほとんど現実感のない話であった。町は酒場や劇場が栄え、活気に溢れている。訪れるのはやはり軍人ばかりで、鼯肩にしてくれればいくらでも金をはたいてくれる、最高の客であった。そのため、どの店も、劇団も、顧客を捕まえようと躍起になった。

フェリアはその激戦区の中央にある小劇場の一つで、歌手をしていた。夕方にさしかかると、町の人通りが多くなる。そして完璧に日が落ちる頃には劇の幕が上がる。フェリアはちらと楽屋の窓から外を見やって、空が赤く染まり始めるのを確認した。フェリア以外の歌手や踊り子たちもぼちぼち楽屋入りしつつある。そろそろ支度を始めなくてはならないが、もう十年以上続けている代わり映えのない動作が億劫だった。

横にいくつか並べられた化粧台の一つを選び鏡の前に腰掛けると、フェリアは頬杖をつく。立ち上がれば上半身が全て映し出せるほどの鏡の中に自分の姿を見つけ、ぼんやりと眺めた。

父親譲りの柔らかなブロンドの髪と、透き通った青い瞳。目や鼻の形、笑うと持ち上がる口の端などは母親に瓜二つだと言う。フェリアは母親の姿をおぼろげにしか覚えていない。だが、舞台を通して時折出会う母を知っているという人に話を聞けば、「なるほど、だから君もそんなに美しいのか」と誰もが恍惚と宙を見つめた。そこから、母親が民衆にどのように見られていたのか大体の予想はつく。しかし、例えば万人の憧れの存在であったとしても、フェリアは母親が大嫌いだった。

「フェリア」

唐突に名を呼ばれてはっとフェリアは意識を取り戻す。鏡の中の自分から声のした左方へと視線を移すと、左隣の化粧台の前に一人の女が凜と腰掛けていた。フェリアより三つ年上である彼女は、ベーラと言う。フェリアが歌うことを専門にしているのに対して、ベーラは踊りを専門にしていた。いわゆる踊り子というやつで、ベーラはその中でもトップの座にいる。

「自分見てて、楽しい？」

淡々と言って、ベーラは櫛で自らの長い黒髪を梳かしはじめた。ベーラはフェリアよりも年上であるが、二人の間に上下関係はない。それはベーラが頓着しないためかもしれないし、フェリアが不行儀であったためかもしれないが、何よりの理由は互いにとっても気が合うためだ。フェリアはこの劇場内で唯一本音をぶつけることの出来る相手をにらみつけた。

「楽しいわよ。準備が面倒なだけ」

「あ、そうなの。てっきり自分に見惚れてるんだと思った」

傍からは厭味にも聞こえなくはないが、ベーラに悪気はこれっぽっちもない。思ったことをそのまま口にしてしまう彼女は、他人と

感覚が違うと言おうか。とにかく、この一風変わったトップダンサーと対等にやっていけるのは自分しかないのではないかと、フェリアは密かに自負している。

「自分に見惚れるって……そんな今更なことはいわよ。もう二十年この顔と付き合ってたのよ」

「準備が面倒なのも今更だと思うけど。もう十年以上毎日やってることじゃない」

ベーラは言いながら慣れた手つきで前髪を止め、顔に下地を塗った。なんとなくむっとしながらも、舞台に穴を開けるわけにはいかないのでフェリアも渋々化粧を始める。すでに衣装は着ていた。今日は久々に演目前に何の予定もなかったので、一人楽屋でのんびりと過ごしていたのだ。

「今更、かもしれないけどさ……毎日同じこと繰り返して嫌になったりしない？」

「プリマドンナってもてはやされるのが嫌になったの？」

「もてはやされるのは嫌じゃないわ」

「でしようね。あんた、歌うのは好きだっていつも言ってるもんね」

「そりゃ、歌うのは好きだけど……」

歌ならば何処でも歌える、と言いかけてフェリアは口を噤んだ。それはフェリアにとって、禁句であった。決して言ってはならないと自分で自分に何度も誓約させた一言である。

言葉を一つ飲み込んだフェリアは、白粉を軽く顔に乘せて瞼の上にも色を重ねた。鏡越しに背後を見やれば、楽屋の中がうるさくならはじめている。本番前に見られるいつも通りの風景だった。そろそろ客席も賑わい始める頃だろう。

早く準備を終えて化粧台の前を譲ってやらなくてはならないな、とフェリアは手に力をこめる。後ろを通ったダンサーの一人に紅を取ってもらい、筆を浸して唇に赤を塗り始めると、突如軽快な足音とともに楽屋の扉が勢い良く開いた。

「フェリアっ！」

続いて聞こえてきたのは甲高い少女の声。少女が扉から手を離すと、古びた木の扉は苦しそうな呻きをあげながら元の位置へと戻っていた。いつかこの少女の力によって、扉がへし折られてしまうのではないか、とフェリアは半ば本気で心配になった。

「アンナ……もっと静かに入ってきなさいよ」

「だって、だって！ それどころじゃないの！ また今日もいらしたのよ、あの軍人さん！」

「誰よ。客なんてみんな軍人じゃない」

「違うっ！ ほら、前言ったでしょ！ 一際きらきらした素敵な軍人さんがいらっしゃったって！ 覚えてないのっ？」

アンナという小柄な少女は、この劇団のソプラノ歌手の一人であった。フェリアが体調を崩すなどしてやむなく舞台に穴を開けると、アンナが代役になることが多い。期待の新星とも呼ばれ、何よりプリマドンナであるフェリアに懐いていた。フェリアも、少女のことを実の妹のように可愛がっている。とは言え、親も違えば生まれも違い、所詮は他人だ。どんなに可愛がったところでフェリアにはこの少女の感覚を理解することができなかった。アンナは何かと客人として現れる軍人に目を付けてははしゃぐが、フェリアの目にはどれも同じ、金を置いていく男としか映らない。

「あんたがいつもそうやって次から次に新しい男見つけてくるから、私だんだんどれが誰だかわなくなっちゃった」

「フェリア、そんな年寄り臭いこと言わないでよ。今回ののは今までのとは全然別なんだから！」

年寄り臭い、という表現を受けて左隣の親友が忍び笑いを漏らしている。ぎろと睨みつけてやると、彼女は「私準備終わった」と知らん振りをして席を立った。空いた席にはアンナが遠慮なく腰掛ける。フェリアの隣を陣取った少女の勢いは増していくばかりだ。

「他の兵士たちと比べてもね、なんていうのかな……輝いてるの！」

「どれもむさくるしいだけじゃない」

「違うんだって！ 一人だけスマートでね、たぶん年齢も若いんじゃないかしら」

「若いのか？ じゃあ最近軍隊入りしたばかりね。そのうち訓練に音を上げて、こんな劇場に来る暇もなくなるでしょうよ」

「ううん、なんか新入りって感じでもなくて……若いのに、落ち着いてて、素敵なの！」

「……つまり貴女の好みなのね」

舞い上がってしまったているアンナには、何を言ったところで聞き入れてもらえない。

フェリアはさっさと化粧を終わらせて、楽屋を出ることにした。人口密度が濃くなり、そろそろ息苦しい。鏡の前で入念に自分の顔を見直すと、椅子を引いて立ち上がった。

「男ばっか見てないで、きちんと仕事もなさいよ」

「それ、フェリアには言われたくない」

「私は仕事のために男と会うの。一緒にしないで」

「やーね、なんか乾ききってるかんじ」

先輩歌手の苦言を物ともしないアンナに、フェリアの方が苦りきってしまう。それでも嫌味に聞こえないのは少女の持つ愛嬌の成す技だろう。これ以上小言を言うのは諦めて、フェリアはダンサーの一人に場所を譲った。準備が間に合わない、と、数人の出演者たちはてんでこ舞いになり始めている。彼女たちの邪魔にならぬよう重い衣装を引きずりながらも壁際に避けて、フェリアは古い木戸を引いた。きい、と軋むその音に反応し、アンナがこちらを振り返る。

「フェリアっ！ その人ね、一階席の後ろから四列目の一番左に座ってるから！ よーく見てみてねっ」

駄目押しするように言い放ち、彼女は化粧台に向き直った。鏡越しにも、少女の浮かれた様子が見て取れる。周囲に花を散らすような上機嫌っぷりに、フェリアは戸惑った。彼女の容姿が愛らしいのは不変の事実であるが、浮かれていると一層華々しい。

アンナはフェリアのことを年寄り臭いと言ったが、あながち間違っ
てはいなかった。フェリアは若い娘のように艶やかな心を持って
いない。娘たちを輝かせるような歓びに対して従順になれないのだ。
??そのような純真さは、とうの昔にどこかへ忘れてしまった。

父の後姿を見送った懐かしい日から、フェリアは人の心を信じる
ことができない。

??フェリア、待っていてくれ。きつと帰ってくるから。

そう最後に言い残し、父が都を去ってから、もう幾年過ぎただろ
う。当時十に満たぬ童女であったフェリアも、今年で二十を越えた。
十数年のうちに劇団のプリマドンナになったフェリアの名声は、今
では都を離れて遠い田舎の町にも聞こえるほどだという。もしも父
が今もどこかで生きているなら、噂を聞きつけて戻ってきてくれる
かもしれない。そんな淡い期待さえ、数年前には捨てていた。今で
は単純に歌を歌うことだけが、フェリアを支えている。

今宵は星も見えない曇天の夜であった。都を照らすのは、華やか
な店から漏れる色鮮やかな灯りと、都の中央にそびえたつ巨大な王
宮の松明のみである。

都の人々は闇を恐れない。本当の闇をまだ見たことがないためだ。
暗闇の中で揺れる艶かしい光に心を躍らせ、劇場へと人がとめどな
く流れてくる。それは、昼間の仕事を終えた軍人たちの数少ない楽
しみだった。とは言え都の兵士の仕事は、王宮の門番であったり都
の治安維持であったり、範囲が限られている。外へ派遣される兵士
たちは、自らにも明日の仕事の内容がわからなかった。彼らには、
一つの楽しみもないかもしれない。

どちらにせよ、とフェリアは幕の端から客席を窺った。軍人で溢れているその光景も、大分見慣れたものだ。どちらにせよ、軍人などろくなものではない。国外の兵士は人の命を奪い、都の兵士は夜な夜な女を奪う。どちらも、何一つ与えてはくれない。

「フェリア」

男の声がして、ふと肩を叩かれた。ちらと目線だけを動かせば、灰色の髭を生やした男がフェリアと一緒に幕間から客席を見下ろしている。

「今日も大入りだな。うちのプリマの人気は衰えない」

「……衰えて欲しいみたいない方ね」

「まさか。閑古鳥の鳴く劇場を維持できずに悔し涙する他の団長どもの仲間入りはしたくない」

男は燕尾服の襟元を調べて、素っ頓狂な顔をした。グロピウスというこの男は、劇団の長を務めている。作曲家であったフェリアの父とは往年からの付き合いで、父の作った曲をいつでも真っ先に採用してくれたのはグロピウスの劇団であった。人付き合いの不得手な父にとって、グロピウスは貴重な相談相手だ。ゆえに、入隊する時にもこの劇場以外にはフェリアを預けることができなかった。

「フェリア、明後日の夜、スールイ公からお招きがあった」

「明後日？ 急な話ね」

「仕方あるまい。ご公務の合間を縫ってお前に会いたがっているんだ」

「まあ、私はいいけど……舞台にまた穴開けちゃうわ」

「アンナがいる。なんとかなるだろう」

フェリアは首をすくめた。本来、何よりも舞台を優先させるグロピウスが譲歩するのは、スールイ公からの招待くらいのものであった。

グロピウスの劇団には女しかない。舞台の監督や合奏団、小間使いたちの中には男もいるが、舞台に上るのは女だけであった。そのためフェリアを含めた女歌手や女ダンサーは、たびたび客から呼ばれることがある。舞台の上での晴れ姿を見て、間近で会いたくなるのだそうだ。グロピウスはそれを厭わないが、面会の代わりに金をとる。また、それは強制されるものではなく、女たちには断る権利があった。そのため、舞台に通い詰める男たちはまず、目当ての女に気に入られるためにと楽屋へ贈り物を寄越す。女はその送り主を舞台上から確認し、気に入れば面会を許すという仕組みになっていた。

だが、スールイ公はそう言った客人とは待遇が違う。彼はこの劇団の後援者である。例えばグロピウスがどれだけ商売上手であろうが、この小劇場では観客の払う金だけで他との激戦に勝利することはできなかった。そこで、スールイ公の後援がとても重要になってくる。月に一度莫大な後援金を寄越す公には、突然劇場を貸し切ることも、唐突に稼ぎ頭であるプリマを呼び出すことも可能であった。

スールイ公からのお招きとあれば、他の男たちと違って拒否することは出来ない。そうしていつも呼び出されるフェリアのことをアennaなどは「あんな親父に呼び出されて可哀想に」と哀れむが、フェリア自身は一度も厭わしく思ったことなどなかった。フェリアには、スールイ公も若いダンサーたちの喜ぶ凛々しい軍人も、等しく見えた。むしろそれならば、金銭に余裕があり、決してフェリアに不自由させないスールイ公の方に利があると思えた。

開幕の合図の鐘が鳴る。けたたましいその音に、フェリアは我に返った。気付けば、出演者たちは各々の立ち位置にて待機している。「フェリア」と他の出演者たちが小声でこちらに呼びかけていた。物思いに耽っていたために全く耳に入ってこなかったが、どうやらずっと催促をしていたらしい。慌てて促されるまま、フェリアは奈落へともぐった。それと同時に、前奏が始まる。危機一髪、間に合

ったようだった。

2、謎の男

プリマの登場は、奈落の底からと決まっていた。何度も劇場を訪れている常連は、そのシーンになると待ってましたとばかりに拍手喝采する。曲目が変わろうと、演目が変わろうと、奈落から上っていく時に舞台上から見える光景は変わらない。誰も彼もが期待に満ちた目で、フェリア一人を見つめてくる。誰も彼もが彼女に陶醉し、顔をだらしなく綻ばせた。??人々は、フェリアに幻想を抱いている。

曲が中盤にかけて盛り上がっていく。それに合わせてフェリアの乗った迫出しの台が持ち上げられた。人の力で動かされるため、ぎこちなく上下しながらゆっくりと舞台上を目指す。クライマックスに合わせて盛大なシンバルの音とともに、照明が全てこちらを向いた。いつもどおり、客席からどっと拍手が起こる。フェリアは人々の幻想を裏切ることのないよう、極上の微笑みを浮かべた。

曲調が変わり、チェロとピアノの音のみを伴奏に、大人しいメロディを歌に乗せる。それまで派手であった照明も薄い青一本に絞られ、フェリアはゆっくりと歌いながら舞台へ一歩踏み出した。

このシーンになると、照明が暗いため、客席の様子がよくわかる。客のほとんどが軍人であり、その全てが恍惚としているのが瞭然になるのだ。彼らは、フェリアを見つめているようで、実は何も見えない。プリマという看板を背負った彼女のことを透かして、自分の理想を思い描いている。フェリアは彼らの理想を壊すことのないよう歌で場面を盛り上げる。それが彼女の仕事だ。

だがしかし、今日はその中に奇妙な視線を感じた。誰も彼もが宙

を見つめてうつとりしているのに、その視線だけはまっすぐフェリアを捕えて離さない。他の誰でもない、フェリアのことを見ているのだ。突き刺すようなその鋭さに、威嚇されている気がしてフェリアは舞台の最前に出ることを躊躇した。客に怪しまれることのないように歌うことはやめず、さりげなく視線の元を探る。

??一階席の後ろから四列目の一番左。

軍服を纏った男であった。軍人であることは確かだが、暗闇に包まれている上に距離があるため肩章までは窺えない。地位はわからないが、やけに覇気のある男だった。雰囲気からのみ判断すれば経験を積んだ老兵のようだが、いかんせん見た目が若い。ゆえに、奇妙だと思う。

男の眼光の鋭さに負けじとフェリアは胸を張った。高らかに高音を歌い上げ、くると衣装を舞わせながら、ふと楽屋でのアンナの話进行出した。

??フェリアっ！ その人ね、一階席の後ろから四列目の一番左に座ってるから！

まさに、その男の座っている位置である。

ああ、あれがアンナの言う、とフェリアは納得した。確かに一際目立つ軍人ではある。そこに何かしらの魅力を見出せはしなかったが、アンナが目をつけた理由はなんとなく理解できた。

（あの子は目立つ物が好きだから）

フェリアは観客に向かって大きく手を広げた。ここが劇の最初の盛り上がりだ。プリマのソロが終わり、一気にオーケストラが参入してくる。華やかな音の重なりとともに、今まで消えていた照明にも一斉にスイッチが入る。フェリアが最後の一音を歌い上げると、盛大な拍手が起こった。フェリアは胸の前で手を重ね合わせて息を

吸う。網膜を痛いほど刺激する光の所為で、もはや観客の顔を見ることは適わなかった。あの奇妙な男の姿も見えない。

上手に捌けながら、彼女はさりげなく男のいる方向を一瞥した。すると、姿は鮮明でなくとも確かにこちらを見ているとわかるほどの強い視線を返される。フェリアは眉根を寄せて、幕の裏へと逃げるように引っ込んだ。

??なんだろう、あの男は。

本能的に、身を震わせた。

明るい舞台の方からは豊やかな旋律が絶え間なく聞こえてくる。演目はまだ、始まったばかりだ。

一通り演目が終わると、女たちは楽屋へ一度帰る。化粧を落とし衣装の着替えを行い、その間にファンからの贈り物が届けられる。その内容によって女たちは呼び出しに応じるかどうかを決める。応じる場合はその男のもとを訪れ、拒む場合は「また次の機会に」と鑑賞券が一回限り割引される優待券を丁稚に託す。

フェリアは劇団の看板とだけあって、届けられる贈呈物の量が他の踊り子や歌手の二倍近くあった。アンナなどはそれを羨むが、正直言って面倒臭い。全員の相手を出来ればいいのだが、体は一つしかないためその中から一人を選ばなくてはならず、その作業がまた億劫だった。

「ベーラ」

フェリアは暑苦しいプリマの衣装を脱ぎ捨て普段着にしているドレスを纏う。隣にいる親友も、フェリアほどではないにしろトップダンサーの肩書きのためか大量の贈呈物を抱えていた。フェリアは

たくさんの贈呈物の中から最も高価そうな物を選ぶため、仲間たちにはもう少し相手の男を考えると諫められるが、ベーラの場合はさらに淡白である。彼女は最初に目に入った物を持ってその送り主に会いに行った。曰く、「直感は裏切らない」。フェリアのやり口には散々非難を述べる少女たちも、ベーラに対しては何も言わなかった。どうにもこのトップダンサーの所作は一つ一つ何かを超越しているように見えて、周囲にも口の出しようがないのだ。

フェリアは、今回も贈呈物の山を受け取り三秒ほどで答えを出したベーラの肩を叩いた。

「アンナの言っていた軍人、あんたも見た……?」

「ああ、ナイザー准尉でしょ」

ベーラは真っ先に目に付いたらしい熊のぬいぐるみを片手に取って、高く結わえ上げた髪を解く。艶のある黒が広がった。フェリアは澄ました親友の顔を見て、瞬く。

「……知ってるの?」

「有名なもの」

ベーラの受け答えはいちいち短絡的である。わかりやすいと言えばわかりやすいが、詳細が何も伺えない。フェリアは彼女の使っている化粧台の上に腰掛けて、先を促した。鏡の前を遮られてベーラは少し鬱陶しそうな表情をしたが、すぐに諦めたのか、櫛をとって髪を梳きはじめる。

「軍人の間では有名なんですって。オレーク・ナイザー。まだ准尉だけれど、あちらこちらで功績をあげてて、ラウグリアの新星だそうよ。彼が昇進すれば西国エウリアの滅亡も遠くないって」

「……そんなに凄いの?」

「知らない」

「でも、それだけ知ってるんなら、アンナに教えてあげればよかったのに」

「聞かれなかったもの」

フェリアは肩を竦めた。

あの男は、舞台上からでもわかるほど他とは明らかに違う空気を纏っていた。今まさに獲物を狩ろうとしている猛獣のようなあの覇気は、近い将来他国の軍隊を滅ぼし他国そのものを滅亡させるための物だったのか。フェリアは複雑に交錯する胸のうちをぐっと押さえ込む。

「……野蛮だわ」

「それが軍人の仕事でしょう」

「大体そんなに凄い人がどうしてこんな民衆の劇場に来てるのよ」

「彼だってただの民衆よ」

言い返すことが出来ずに、フェリアは口を噤んだ。楽屋の外から自分を呼ぶ丁稚の声が聞こえる。今日は誰の誘いを受けるのか、あるいは誰の誘いも受けないのか早く返事を超越せとの催促だろう。「行かないの？」とベーラが横目に問いかけてくる。フェリアはふんと鼻を鳴らした。

「どんなに偉くたって、所詮軍人だものね」

「軍人だろうとなんだだろうと私たちにとっては大切なお客様よ」

ベーラの言葉にはあえて反応せず、彼女は化粧台から降りた。自分への贈り物の束の中から最も値の張りそうな金の時計を選んで化粧を落とす女たちの間をかきわけた。

「おつかれさまです」という後輩たちからの挨拶にはにっこり笑って返す。先輩の幾人かがこちらを睨んでいたが、それに対してもにっこり笑っておいた。自分より後に劇団入りしたくせにあつという間にプリマの座をかつさらっていったフェリアのことを妬む女も少なくはないのである。また、彼女たちの反感を買う要因はフェリアの不遜な態度にもあるわけだが本人は気がつかないふりをしていた。

楽屋の外へ出ると新鮮な空気の臭いがする。劇団に入った当初は終幕後の楽屋などあまりの香水の濃さに息の出来たものではなかったが、今ではすっかり慣れてしまった。

フェリアは丁稚に金の時計を渡し、大きく伸びをした。丁稚の仕事は女たちの選んだ送り主を探し、それ以外の男を追い帰すことである。店の前で争い沙汰の起こらぬように、選ばれた男以外は女の姿を見ることが禁止されている。

フェリアは自分のブロンドをかきあげながら、こっそり窓の外を覗いた。何人かの男がわらわらと帰っていくのが見える。そしてその合間に、あの男を見つけた。思わずフェリアは目を細める。

(ナイザー、准尉……?)

夜闇の中、照らす物は頼りない街灯のみであるため一瞬見間違いかとも思ったが、確かにそれは先刻劇場にいた例の男であった。やはり奇妙な男で、傍らに幾人かの女を従え??その風体からして、貴族階級の女に見えた。貴族の女が外へ出ることはとても珍しい。??特にこの劇場の女を待っているわけでもなさそうである。何のためにまだ劇場の前に残っているのか、甚だ不思議でならない。

その委細を探れないかとフェリアが窓辺に身を乗り出そうとする
と、「プリマ」と声をかけられた。丁稚が戻ってきたらしい。この劇団の丁稚はなかなか有能で、名残惜しむ男どもを追い払うことにかけては天才だった。

仕方なく、フェリアは窓から離れる。表には決して見せられない汚れた通路は、裏玄関へ通じている。観客のためには開かないその門は、内側から団員達が出るためだけに使われていた。そして大抵、男たちはその前で待っている。

フェリアが門をくぐると、金の時計を手にした男が優越感たっぷり
にこちらを見下ろしていた。何度か見たことのある顔である。おそらく裕福な家の出身なのだろう。彼はフェリアのために相当な額を費やしているはずだ。

「待たせたわね」

仕事のための笑顔を貼り付けて、彼女は男のことを見上げる。当然のように差し出された腕に自分の腕を絡ませて、二人は歩き出した。この男はプリマと一緒に過ごす時間を楽しむため、無理に会話をする必要もない。フェリアにとってはこれ以上ないほど楽な仕事だった。

劇場から離れる前にふと気になって男たちのたむろする門の前に視線を投げたが、すでにナイザーの姿はなかった。あの貴族風体の女たちと何処かへ行ったのだろう。本当におかしな軍人である。

あまり余所見をしては仕事にならないので、フェリアはすぐに彼のことは頭の中から追いやる。それがどんな男であろうと、フェリアには関係がない。彼女は黙って自分の役をこなすだけである。

3、歌姫の力と矜持

アナトリー・ヘルム公爵。貴族制度により支配されるラウグリア国にて公爵の地位を持ち、首都エルヴァから南西の方角へ離れたスールイと呼ばれる田園地域に屋敷を構える男である。数年前に父から位を継いだ。スールイ公という通称を持つ。

彼の屋敷に呼ばれたフェリアは、朝一番に馬車に乗せられ、午前中いっぱい揺られて過ごした。その道中で転寝をしてしまったらしい。目が覚めると、普段過ごしている都とはまるで違う、延々と続く緑に包まれていた。

他国には「北国」とも呼ばれるラウグリアでは、秋から春にかけて地面が凍り雪に覆われてしまうため、田畑を構えるのが難しい。スールイは、ラウグリアの中でも珍しい稔り豊かな地域であった。

季節は夏であり、草木は青々と茂っている。フェリアが来るなり喜んで屋敷内へと迎え入れた公爵は、自慢気にテラスから一望できる景色を見せてくれた。外へ出る時は常に仮面をかぶるフェリアも、この時ばかりは素直に感動を覚えた。ラウグリアにおいて、これほどの緑を見ることが出来るのはスールイだけではないだろうか。

テラスでの昼食を終え、フェリアは公爵に頼まれるままに歌を歌った。舞台上で壮大なオーケストラに合わせて歌うのも嫌いではないが、こうして伴奏もなく好きな曲を口ずさむのはまたそれとは違った良さがある。フェリアの父がかつて残した曲のほとんどは、どちらかと言えば鼻歌程度に口ずさむことに向いており、フェリアは歌をねだられると必ず父の歌を歌った。

揺り椅子に腰掛け、瞑目してフェリアの歌に聞き入っていた公爵は、それが終わると同時に軽く手を叩いた。舞台に響く盛大な拍手

も、一対一で自分へと贈られる素朴な拍手も、フェリアには同じ重みに感じられる。

「??君には、力があるね」

それはフェリアが歌うと、たびたび公爵の漏らす感想であった。評論家たちも、劇場を訪れれば「力のある歌手だ」と口を揃えていたので、おそらくそれらと同じ意味なのだろう。その「力」とやらにより、フェリアは他の歌手たちを制してプリマになり、他の劇場を制して自らの劇場を繁栄させたのだ。フェリア自身が望んだ以上に、その力は強大だった。

「公爵様の、プリマですもの」

フェリアはさらりと答えて会釈する。公爵は満足そうに頷くと、ソファーに座るよう促した。テラスに通じる広い居間には、一人掛けのソファーが六つ置いてある。中央にはガラスのテーブルがあり、シャンデリアの光をきらきらと反射させていた。

フェリアの腰掛けた向かいに腰を下ろしたスールイ公の頭髪には、ちらほら白髪が混ざっている。位をもらって家を受け継ぎ、仕事をやりはじめる時にはすでに年老いてしまっているという貴族の生き方は、フェリアには理解しがたいものであった。

「相変わらず美しい声だな」

「おかげさまで、まだプリマの座を守り通していますわ」

「お前に敵う新鋭はそうそう現れるまい……。歌の御礼と言ってはなんだが、何か欲しい物はないか」

「欲しい物、ですか？」

「贈る物として一般的な物は何不自由なくファンからもらっているだろう？ お前が欲しいと思う物はなんだ」

フェリアは思わず唸りを上げた。

何か欲しい物はないか、とはフェリアへ向けられる問いの中でも最も多い物の一つであった。なんとかして人気者のプリマの心を自分へ向けようと四苦八苦するファン達は、彼女の望む物を知りたがる。だが、正直なところ、フェリアには格別欲しい物などないのだ。

それでもいつもはその時々に応じて相手の男に用意できそうな物を選んでねだっていた。しかしスールイ公を相手にすると、言葉に窮してしまふ。貴族階級の中でも最も高い位に拝命されている彼に、大抵の物は手に入れられてしまふから。

「……公爵様、私、欲しい物なんてございませんわ」

正直に答えると、銀の縁を持つ眼鏡の奥が、興味深そうな色に輝いた。

「欲しい物が無い、と？ 若いくせに、うちのプリマには欲が無いな」

「欲がないわけではありません。でも、欲しい物ってなんでしょう……」

フェリアはメイドが出してくれた紅茶のカップを手にとって、赤い水面に目を落とした。ゆらゆらと波打つ中に、自分の顔が見える。

「公爵様のおっしゃる通り、ありとあらゆる物が連日私の元へ届けられます。形ある物には不足しておりません」

「では、形ない物が欲しいか」

「そういうわけでもありませんの。私は歌が好きですけど、歌うための場所もあれば歌うための声もあります。私をプリマにまで持ち上げてくれた容姿も、世話を見てくれる人も、友人だっております。大勢の人に愛されてる自覚だってありますわ。しいて言うならお父様に帰ってきて欲しいくらいです」

「お前を芝居小屋に預けて消えた父か。さすがに行方の知れぬ軍人を探すのは、私にも難しいな」

「それどころか、生きてるかどうかも定かじゃありませんもの」
フェリアは誤魔化すように笑ってみせた。気まずい空気にならぬようにと口に含んだ紅茶は甘い。何の葉を使用しているのか、花のような香りがした。

「……では、今のフェリアは満たされているということかな？」

「……それは」

フェリアは再び考え込む。満たされているかと問われれば、答えは否であった。しかしながら、何が足りないのかはわからない。ゆえに日々、理由なき憂いを感じている。

「例えば、劇場を出てみたいと思ったことは？」

「え……」

「フェリアは、自分には歌う場所があると言ったが、その声さえあれば、歌う場所など何処でも確保できよう。何もラウグリアの小さな劇場にこだわる必要はあるまい」

「それは、どういうことですか」

「私と一緒に西国へ行く気はないか」

フェリアは目を大きく見開いた。

「……冗談でしょう？」

「本気だとも」

驚きのあまり手から滑り落ちそうになったカップを受け皿に置き、テールへ戻す。まっすぐ見つめてくる公爵の目は、冗談を言っているようには見えなかった。

「でも、西国エウリアは、戦地なのでしょう……？」

「東国ほどではない。今のうちにもぐりこんでしまえば問題ない」
「けれど、どうして……？」

「近い将来、西国エウリアはこのラウグリアの確固たる敵になるだろう。その時に、敵情を探ることが出来ればいいと思わぬか？」

「そんなこと……公爵様のやるお仕事ではありませんわ」

「軍に任せておけと言うか？」

普段柔らかな物言いしかししない公爵の強い口調に、フェリアは言葉を呑んだ。公爵は掌を重ねてその上に顎を乗せる。いつになく難しい顔つきをしていた。

「この国は皇帝を中心とした貴族の国だったが……その時代はもう終わった。今、国は軍に食われてしまっている」

フェリアは頷いた。かつて、都へと降りて劇を鑑賞するのはほとんど貴族ばかりだったという。しかし、フェリアはその時代を知ら

ない。彼女が舞台に立つようになってから、客席が軍人で埋まらない日はなかった。

「そのうち軍は我々貴族の存在をも疎むようになるだろう……その前に、私は軍に重宝される存在にならなくてはいけない」

公爵の言い分は尤もに聞こえた。フェリアは国情などほとんどわからぬ。しかし、都を闊歩する軍人の横暴な振る舞いを目にすると、彼らが本格的に権力を握るなりそれまで王宮を支配していた貴族を排除するのはごく自然の成り行きに思えた。

「……公爵様のお考えは、よくわかりますわ……けれど、どうして私と一緒に？」

公爵の気分を害さないようにと、緩やかに問いかけると、硬かった彼の表情が一気に和らいだ。いつも通りの公爵の顔だ。

「お前がいれば、見知らぬ西の地でも路頭に迷うことはあるまい。もともと劇場すら所有していなかったグロピウスの劇団をあそこまで繁栄させたように、きっと幸福をもたらしてくれる」

「そんな……買いかぶりすぎですわ」

「買いかぶりなどではない」

公爵の顔が再び険しくなる。

「お前には、力がある」

今まで何度となく繰り返されたその台詞が、やけに重々しく聞こえた。フェリアは、はいともいいえとも言うことができない。金縛りにあったように固まってしまった。その昔、母が地方の豪族につられて劇団から姿をくらましたことが頭をよぎる。自分は、決して母のようにはならない。それだけを心に決めて生きてきた。もしここで安易に公爵の手をとってしまったら、それは自分への裏切りとなり、父への裏切りとなるのではないか。そう思うといくら公爵様の頼みであっても、軽々しくは領けない。

黙りこくって俯いたフェリアに、公爵は「今すぐにといいわけではないから」と付け加えた。彼は本気である。フェリアはしばらく言葉を探して黙り込んでいた。

「この一件は他言無用」と公爵に釘を刺され、フェリアが彼の邸宅を出たのは夕暮れ時のことであった。まだ先のことだからと彼は言ったが、グロピウスに聞こえてしまったら彼がパニックに陥ると見越したのだろう。グロピウスはプリマドンナとしてのフェリアはもちろん、自分の友人の娘としてのフェリアも大切にしてくれている。フェリアの父、ラドレッサが戻ってくるまで何があっても護ってやるからとは彼の口癖だった。フェリアも、グロピウスを父の代理と思っている。余計なことで心配をかけたくはないが、彼に黙ってこの件を自決する気もなかった。とりあえず、しばらくは様子を見ることにして、口を噤んでおこうと決める。

邸宅の門の前には、フェリアが都から乗ってきた馬車が彼女を待っていた。劇団が唯一所有している車で、グロピウスやフェリアなど劇団の重役しか滅多に使わない。そしてその隣には見知らぬ馬車が停車している。丁度今到着したようで、馬が足並みを整えると、馬車の扉が開いた。スールイ公の客人か何かだろうとフェリアは大して気に止めず、自らの乗る車の方へ回った。劇団専属の御者が車輪の脇に控えている。なぜかそわそわとしていて落ち着かない。彼はフェリアの姿を見つけると、はっとしたように顔をあげて、駆け寄ってきた。

「プリマ……！」

そのただならぬ様子に、フェリアは何事かと目を瞬かせる。昼時に此処へきてから数時間が経過しているが、その間に何か事件が起こったのだろうか。御者は困惑したように馬車の方をちらちら眺めながらフェリアの顔色を窺った。

「実は、その……馬車の車輪に故障が見られまして……」

御者はおどおどしながら、馬車の後輪の方を示した。つられて後輪を見るが、フェリアの目では故障の有無などわからない。鉄で作られた黒い輪は、おおよそ不調があるようには見えなかった。

「外側からはわかりづらいもので……私も、まるで気付かず、ここまで来てしまいました……行きに無理をさせてしまったように、帰りはエルヴァまでもつかどうか……」

「まあ……」

都まで辿り着ければ、そこからは町馬車を拾ってもいいし、いざとなれば歩いてでも戻れる。しかし、その途中の砂利道や山道で身動きが取れなくなってしまったら、もはやなすすべがない。

フェリアが柳眉を寄せると、御者は縮こまった。馬車を走らせない時は、馬車や馬の整備が彼の仕事である。車の不調に気付かなかったのは彼の落ち度だ。おそらくフェリアを待つ間にそのことに気が付き、今まで自責の念に駆られていたのだろう。グロピウスがいれば団長としてその失態を叱るだろうが、プリマにその権限があるかどうかはわからない。ただの不平になってしまいかもしれないし、そもそも彼を責めたところでどうしようもないので、致し方なくため息を吐いた。

「公爵様に頼んで、馬車を借りるしかないわね。私は明日も舞台があるし……」

「申し訳ありません……」

深々と頭を下げた御者を前に、フェリアはすっかり窮する。公爵から馬車を借りられればいいが、彼の足を奪ってしまつては、公務に支障をきたしてしまうかもしれない。公務と天秤にかけられてしまったら、フェリアの舞台に勝機のあるはずもなく、フェリアは足止めを食らってしまう。

「とりあえず、私は早々に都へ戻ります」

「壊れた馬車で？」

「私一人なら、なんとかかなります。いざとなれば馬に乗って帰りますし」

「鞍がないわよ」

「轡はありますので、都までならなんとか……」

いざとなつたら、御者が都まで往復して戻ってくるのを待つしか

ない。とにかく公爵に相談してみないことには始まらない。フェリアが再び門を潜って屋敷の方へ戻ろうとすると、不意に引き止められた。見知らぬ声に、足が止まる。振り返ると馬車に片手を乗せた男がこちらを見ていた。

「お困りのようなら、同乗して行かれぬか？」

先刻、門の前に到着した馬車から降りた人物である。夕闇の中、馬車の影に隠れて顔は見えないが、軍人らしい。普段であれば見知らぬ軍人に同乗を頼むなど有り得なかったが、今は願ってもない話であった。

「よろしいの？」

「構わんよ。これから都へ引き返すところなのでね」

ありがたい、とフェリアが胸の前で手を組むと、隣に控えていた御者もほっと胸をなでおろしたようだった。これで彼の過ちが消えるわけではないが、少なくとも明日の舞台に彼の所為でプリマが穴を開けてしまうという大事故は防げそうである。

「助かるわ」

「元々二人乗りの車だ」

なんてことはない、と男は肩を竦めた。夕日が完全に落ち、道も暗くなる。男の乗ってきた馬車の御者が、自分の車の前灯に火を落とした。ほんわりと暖かい火にその場が照らされる。それまで黒い影でしかかった軍人の顔が炎によって映し出された。それはとても、見覚えのある顔立ちであった。端整な造りをしており、鋭い目を備え、どこか虚無的な笑みを称えている。フェリアは思わず息を呑んだ。

「ナイザー……准尉……」

それは、少し前に劇場の観客席にあった顔と全く同じであった。オレーク・ナイザー。今まさに名を上げている軍人だと、ベーラに聞いたばかりである。まさかこんなところで顔を合わせるとは、夢にも思っていなかった。

名を呼ばれたナイザーの方ははて、と首を傾げている。

「どこかでお会いたか……？」

フェリアは目を丸くした。しばしの間、瞼を下ろすことすら忘れる。それほどの、衝撃であった。

フェリアは、都ではその名を知らぬ者がいないというほど名だたる歌手である。その姿見たさに劇場を訪れた者は、一生彼女を忘れることなどなく、実際フェリアは知らぬ者から名を呼ばれることはあってもその逆を経験したことがなかった。しかも、この男は幾度かフェリアの舞台を見に来ているはずなのである。

「……フェリア・パーチスよ。グロピウスの劇場でプリマをやっているの」

洩々自己紹介をすると、ようやく思い出したように、ナイザーは手を打った。

「ああ……思い出した。何度か舞台を拝見したことがある」

そんなことは知っている。フェリアは苦々しく頷いた。そうでなければ、なにゆえフェリアが数多の軍人の一人である彼の名を覚えているというのか。

「偶然とは言え、名高いプリマと同乗できる機会を得たんだ。光栄に思うよ」

どこまで本気かわからない口調で？　ほとんど社交辞令だろう？　彼は言い放って、馬車の扉を開いた。どうぞとエスコートされて、拒むわけにもいかずにフェリアは車へ乗り込む。紅一色に装飾された席の奥へと腰掛けて、まだ外にいる男を軽くねめつけた。

「名高いプリマの名を忘れていた男なんて、始めてよ」

すると、何故だろう、男は声色高く笑った。

「プリマの矜持を傷つけたかな。申し訳ない」

上辺だけの謝罪は、苛立ちを募らせるばかりである。それでも、ほぼ初対面の相手に対してこれ以上憎まれ口を叩きたくなかったので、ぐっと唇を結んで小窓の外を眺めた。他方のナイザーは少しも気にした様子を見せず、フェリアの隣に乗り込むと扉を閉める。「都まで」と御者に声をかけたところからして、馬車は彼の持ち物で

はないのだろう。この上、彼の車で送ってもらって借りをさらに大きくしたくなかったため、フェリアは心底ほっとした。

歯切れの良い鞭の音に続き、馬の足音と車輪の転がる重い音がする。馬車はゆっくりと前進を始めた。

腰を落着けたナイザーは、赤いクッションに背をもたれて腕を組む。公爵の話によって悩みを抱えていた上に馬車を損ない、初対面の軍人に無礼を働かれてフェリアの機嫌は最悪だった。これ以上は何も話したくないという意を込めて見る物もない外を眺めていたが、この無骨者には全くと言っていいほど通じなかったようである。

「? ?ところで、矜持高いプリマが、なぜ俺ごときしがらない軍人の名を知っていたのかな?」

フェリアは、ベーラからうっかり情報を得てしまったことを本気で後悔した。

4、物知らずな歌姫と奇妙な男

走行中、馬車の中は恐ろしく静かだった。フェリアが会話の一切を拒んだためだ。途中まではいろいろと話しかけてきたナイザーも、いい加減に嫌気が差したのか、途中から口を閉ざした。

劇団の外の人間、客になるかもしれない人間に対して無視を決め込むだなんて、こんな行動に出たのは初めてのことだった。フェリアが会話をするのは劇団の人間以外には客人くらいのものだし、相手が客であれば例えどんなに嫌いな相手でもフェリアは仮面を被ることができた。そもそも金を払ってまでフェリアに会いたいと言う輩は彼女に対して不遜な態度を取ったりしない。少しでも彼女が気分を害せばプリマの機嫌を取ろうと必死になるので、会話を拒む必要もなかったのだ。

スールイの田園地帯を抜けると、次には山道が迫ってくる。馬車は暗い山道に差し掛かっていた。山奥とは言え人の手によって開かれており、今では住まう獣も少ないが、夜になるとどこことなく不気味である。

「ようやくスールイを出たか……都まで遠いな」

まだ道のりの半分にも到達していない。そう呟いたナイザーにつられて、フェリアも延々と続いている道を見やった。暗闇の中、鬱蒼と生い茂っている山の木々には得体の知れない恐ろしさがある。もしもこんな道の途中で馬車が動けなくなってしまったりしたらと想像するだけで慄いた。隣に座る男は気に食わないが、同乗させてもらった一点には感謝の念が浮かぶ。

「……何の用があったのか知らないけど、貴方がスールイに来ていて助かったわ」

ぽつりと零すと、ナイザーがぴくと反応した。初めてフェリアか

ら能動的に発された言葉に、少なからず喜んでいるらしい。彼はやと笑った。

「何用があつてこんな辺境まで来ていたのか、知りたいか」
いちいち彼の台詞は癪に障るものばかりである。

「……別に」

「スールイ公のご息女を都から送ったのさ」

聞いてもいないのに説明されて、フェリアはうんざりと後れ毛をかきあげた。

そういえばスールイ公には二人娘がいたな、と思い出す。もしも本当にスールイ公が西国へ行くつもりなら、娘たちをどうするつもりなのだろうと頭の片隅で考えた。その一方で、たかが准尉でしかないこの男が何故仮にも公爵であるスールイ公のご令嬢と知り合ひなのかという疑問が浮かぶ。フェリアは横目でナイザーを見上げた。

「そういえば、一度うちの劇場に来た帰りにも、貴族のご婦人と一緒だったわね。あれが公爵様の？」

「そんなこともあったな……プリマは意外によく見ていらっしやる」

ナイザーの口の端が持ち上がる。しまったと思うが既に遅い。劇場の窓からこっそり彼の姿を窺っていたことを計らずも吐露してしまったことに気づき、フェリアは恥辱に赤くなった。

「ちなみにあれはスールイ公のご息女ではないぞ。知り合ひの伯爵夫人の妹御で、一度民衆の娯楽を見てみたいとおっしゃっていたから、グロピウス座に連れて行つたんだ」

「……どうでもいいわよ、そんなこと」

「これは心外。プリマの方から聞いてきたんだらう」

「貴方が何人の貴族のご婦人をたぶらかしてしようと、どうでもいいと言つたの」

「貴族だけに傾倒しているつもりはないが」

それこそどうでもいいことだったので、フェリアは無視すること

に決めた。再び彼女が無言になったのを受けてさすがに悪ふざけが過ぎたと思ったのか、ナイザーは意地の悪い笑みを隠す。彼は癖のある茶の髪を自分で撫でながら目を細めた。

「???今のラウグリアはどう傾くか、全く先が見えんからな。少しでも人脈を広げておきたいものだ」

貴族の女と遊び歩いていることを何の恥もなく吐露しておきながら、急にしおらしく言うものだから、覚えるのは違和感ばかりだ。

「……それが女遊びの大義名分?」

「まあ、そんなところだ」

「女を使って准尉までのぼりつめたとでも?」

「否定は出来ないな」

ナイザーの面に食えない笑みが戻ってくる。思わずフェリアが表情を陰しくさせると「冗談だ」とすぐに弁明した。それでもあながち冗談に思えないのは、ふざけた人柄の所為だろう。ベーラから聞いた「オレーク・ナイザー」という人物は、この世に二人としない傑物という印象だった。軍人なら誰でもその名を知っているというのだから、あながち間違っではおるまい。だが、この男のどこから傑然たる所以を見出せばいいのだろう。

フェリアがぼんやりと悩んでいると、ふとナイザーが唸りをあげた。続けて吐き出した声は低い。

「ラウグリア国の民は、自分がいかに恵まれているのかを何故か納得できていない」

今までになく真面目な声色に、むしろ気味の悪いものを感じる。フェリアが首を傾げると、ナイザーは試すような視線を投げかけてきた。

「お前は、そもそも何故この戦争が始まったか知っているか?」

「……知らないわ。今から十年以上も前のことじゃない」

「そうだな、今から十三年前のことだ」

十三年前のあの日、フェリアの父は兵卒になると言って姿を眩ました。フェリアには、この戦争の意味などどうでもよかった。とに

かく父が戻ってくれば、それでよかった。

「北国ラウグリアは、東国ヤンムを占拠する戦を始めた。何故なら、東国ヤンムはラウグリアと違って冬が短い。北国は実り豊かな土地を欲しがった。そして十年かけて東を征服し、今度は西国エウリアを配下に置かんとして戦っている。理由は、東に戦いを吹っつけた時と同じだろうな」

しかし、とナイザーは顎を引いた。彼の目の色が変わる。それはフェリアがかつて劇場の舞台から見た物と同じで、殺気すら感じられるほどの鋭い覇気を帯びている。彼女は思わず身震いしそうになるのを、必死で押しとどめた。

「??しかし、東が本当に豊かな土地ならば、何故、東西南北四カ国の中で最も貧しい国と言われているのか。北は冬こそ長いが、英知に恵まれている。西国のように宗教に頼らずとも何百年も巨大な国家を支えてこられたのは、人間の考えが発達していたからだ。??それに、北国には獣人がいない」

「獣人……?」

「お前はそれも知らないのか」

呆れたように吐き捨てられてむっとするが、知らないものは仕方がない。フェリアが口を噤むと、ナイザーはため息をついた。

「獣人。西国では人畜とも呼ぶらしいが、俺たちは獣人と言うな。人の子として生まれるが、成長するに連れて巨大な化け物になっていく生き物だ」

「……まさか」

「信じられんのも無理はない。何故か、北では生まれてこないからな。かと言って南に行けば行くほど多いかと言えはそういうわけでもないらしい。獣人の出生率が最も高いのは東国だ」

「人間が、化け物を生むの……?」

「端的に言えばそういうことになる。どういう原理なのか未だにわからないが、生むまで親にもわからない。しかも、幼い時には人の形をしているというから尚更厄介なんだ」

フェリアは想像出来ずに、ただただぼかんとした。

「東国の発展が遅れているのは、この獣人の影響だと俺は思っている。成長してしまえばただの獣でしかないから、人には扱えない。ゆえに人は獣人を殺すが、大抵の親は情が移って殺せず、山奥に捨てるか自分の方が子供に殺されちまう。そして野生化した獣人が山奥や森に溢れるわけだな。東では、こんな風に夜中の山奥で馬車を無防備に走らせることなど出来ないそうぞ」

言葉を失ったフェリアに苦笑し、ナイザーは馬車の小窓に肘を突いた。月明かりと前灯だけで暗い山道を走れるほど、北国ラウグリアは恵まれているのである。

「……それなのに、ラウグリアが戦に暴走しているのは、『力』があるからだろうな」

「力」という単語に妙な気迫があり、フェリアは不思議に思ったが、これ以上物知らずだと思われたくなかったため、疑問を飲み込んだ。そういえば、スールイ公も妙にフェリアには「力」があると繰り返した。それとこれとが関係あるのかないのかさえ、フェリアには判断できない。

「……あんただって軍人じゃない。国を戦に走らせている一員よ」
誤魔化すように憎まれ口を叩いた。そうすれば、ナイザーが先刻までのようなふざけた調子を取り戻すと思ったのだ。しかし、彼は「そうだな」と低い声色で呟いたきり、閉口してしまった。月夜を眺めて、こちらを見ようもしない。

?? 本当に、奇妙な男である。

准尉という立場にありながら自国の体勢を批判し、しかもそれを初対面のプリマドンナに向かってぼやく。腹の立つほどふざけているかと思えば、気味の悪いほどに真面目腐る。

ぱかぱかと軽快に馬の闊歩する音が、夜道の静寂の中へ響き渡った。そろそろ山を越え、都の見えてくる頃合である。

それから後もずっと、馬車の中は静寂に包まれていた。

5、殺意にもよく似た

グロピウス座で新しい演目が始まる。

その知らせは都中へと瞬く間に広がり、おかげで劇場は初日から連日満席となった。役者はリハーサルと本番の繰り返しに日々休む暇もない。彼女たちの健康を考慮し、グロピウスは新しい演目が始まってから一月は客から役者へのアプローチは贈り物のみとし、面会を禁じた。それでも多忙であることに変わりはない。特に、出番の多いプリマドンナには席の暖まる暇もない。夜の時間を客に取られるだけで済んだかつての生活がどんなに楽であったかと骨身に染みていた。男と過ごすなら、適当に頷いていればいい。しかしながら、自分が舞台に立って歌う時には絶えず気を張っていないとてならない。十日目の舞台を迎える頃には、疲弊しきっていた。

リハーサルが終わり、本番はあと二時間と迫っている。舞台監督から出される終了の合図に、自ずと安堵の息が漏れた。ようやく与えられた休憩に、フェリアは縋りつく。楽屋へなだれ込むように戻ると、部屋の端にぽつんと置かれたソファーへと飛び込んだ。楽屋の中にはまだ誰もいない。無音の心地よさと柔らかな背もたれの感触に、意識が飛びそうになる。まだ本番までは二時間あるのだし仮眠でもとうとうかと目を瞑りながらも思考していると、不意にソファーが沈んだ。いつのまに楽屋へ入ってきたのだろう、誰かが隣に腰掛けたりしい。

「大丈夫？ 死体みたいな顔よ」

天下のプリマドンナにこんな口が利ける人物など限られている。フェリアは隣で涼しい顔をしている黒髪の美女をまじまじと見つめた。

「この過酷なスケジュールこなしてりゃそうなるわよ……。ベーラはなんでそんなに平静なの？ 本当に人間？」

「両親ともに人間だったわ」

ベーラ特有の言い回しに辟易する。彼女は人間の子は人間であるという常識を指して言っているのだろうが、フェリアの中にひよつと悪戯心が湧いた。そのまま思いついたことを口にしてみる。

「人間が、獣を生むこともあるらしいけど？」

滅多に取り乱すことのないベーラも、これにはさすがに吃驚するだろうと期待したが、彼女は相変わらずあっけらかんとしていた。

「ああ、獣人でしょう？」

こうも簡単に切り返されてしまうと面白くない。半ば不貞腐れて、フェリアはそっぽを向いた。

「どうして、ベーラはなんでも知ってるの」

「面会する男から聞くからよ。知識を乞うと喜ぶ男は多いわよ？特に軍人にはね」

ベーラは、アンナとは違った意味で好奇心が旺盛だった。アンナが男女の色めいた話について興味を持つのに対して、ベーラは世情を知りたがる。そしてフェリアは、そのどちらにも興味がなかった。ゆえに、あの氣に食わない男に「そんなことも知らないのか」と無知を馬鹿にされるわけである。

「私達ただの役者よ？ 別に知らなくたっていいじゃない、そんなこと……」

「知ってて損することはないわ。得することはあってもね」

最後の負け惜しみすら安易に切り捨てられて、すっかりフェリアはむくれた。ベーラはいつものことだと言わんばかりに平然としている。この二人の会話はこのように知りきれトンボになることが多い。だが話したいことは充分話したという満足は両者にあるため、その後に続く沈黙は特に不快でなかった。

他の出演者たちはそれぞれ劇場の隣に建てられた宿舎に戻って休息しているのだろうか。この建物の中には他に誰もいないような静けさの中に、二人は身を任せる。再び眠気が訪れて、フェリアがのんびりとソファ―に身を沈めると、何者かが突如けたたましい音と

ともに楽屋に飛び込んできた。誰も彼もが疲れきっている中で、これだけの活力があるのは彼女くらいのものではないか。そうフェリアがうんざりしたのも束の間、頬を紅潮させ目を輝かせているアナが、フェリアの名を高らかに呼んだ。

「フェリアっ！ 例の軍人さん、また来てるわっ」

「は……」

「ナイザー准尉よ、准尉……！ 彼、准尉なんですって！ かつこいいわよねー！」

アナはよほど気分が高揚しているのか、胸の前で手を組むとくるくるその場でターンした。ひらりと舞い上がる彼女のドレスの裾を見つつ、フェリアはこっそり眉をひそめる。ナイザーという音の響きが、一瞬で彼女を憂鬱にさせた。

あれから幾度か、この劇場内にて彼の姿を見かけることがあった。しかし彼はこの劇場に足を運びながらも、フェリアをはじめ他の出演者たちにも一切興味のなかった。大抵は女連れで現われ、劇を鑑賞するだけでまっすぐ帰ってしまう。それ自体は悪いことでも何でもないはずなのに、何故だか気に入らなかった。

また、どこぞの貴族の女と一緒に鑑賞に来たのだろうとフェリアが心中でぼやくと、まるでそれに反応したかのようにアナがぱちんと手を叩いた。

「今日は珍しく一人だったのよ、彼！ だからちよっと表に出て、会話してきちゃった……！」

アナがぺろりと舌先を見せた。フェリアは目を丸くする。彼が一人で此処まで足を運んだことにも驚いたが、何よりアナがそこまでして彼と接近していることに愕然としていた。相手は毎度違う女を連れて劇を鑑賞に来るような遊び人である。アナとて決して男に困るような立場ではないはずなのに、何ゆえそこまであ的好い加減な軍人に固執するのか。

そう思っただけの反応だったのだが、フェリアの険しい顔を見て、アナはきょとんとしていた。よく考えてみれば、アナが彼に接近

したからと言ってフェリアが衝撃を受けるのは実に奇妙な話である。フェリアはアンナはおろかベーラにも、ナイザーと馬車に同乗した話をしていなかった。ナイザーとの間に不覚にも面識が出来てしまったことを、フェリアの友人たちは知らないのである。それなのに彼女が過剰に反応するのは面妖であることこの上ない。

「……アンナったら、また練習抜け出したのね！」

フェリアは慌ててその場を繕った。隣に座る親友の方を誤魔化せたかどうかは際どいが、少なくともアンナにはそれで十分誤魔化せたようである。少女は納得したような表情を浮かべた後、やんちゃに微笑んだ。

「違うわあ、私フェリアたちよりちょっと休憩早くもらったんだもの！」

「それでも、今は面会禁止の時期なのに。グロピウスが怒るわよ」

「バレなきや大丈夫よ」

アンナは無邪気に笑っている。わずかな休憩時間さえ削り、劇団主の目を盗んでまで男に会いに行こうと思うのは若さゆえか、あるいは性格か。

「普通、そこまでする……？」

「だって、今しか機会がないと思ったし……彼、本当にかっこいいんだもん！　そう思わない、ベーラ？」

「別に」

ベーラは心底興味なさそうに即答した。ベーラは色恋沙汰に関して妙に冷めている。付き合いの長いフェリアですら、一人の男に固執しているベーラを見たことはなかった。??それは、フェリアの言えたことではないのだけれども。

「そっかあ。まあ、ベーラの好みじゃなさそうだもんね……フェリアは？」

まさか自分に話を振られると思っていなかったフェリアは一瞬固まった。咄嗟にどう答えていいかわからずに、目線が泳ぐ。しかし、あの気に食わない男を格好良いなどとはとても形容できそうになく

て、力強く下方をにらみつけた。

「別に。ただの、軍人じゃない」

「相変わらず、フェリアは軍人が嫌いね……」

アンナが困ったように首をすくめた。軍人だからってみんな悪い人じゃないのよと彼女は言うが、フェリアは顔をしかめただけだった。こればかりは幼い頃潜在的に埋め込まれた意識なので、フェリア自身にもどうしようもない。

アンナは諦めたような仕草を見ると、二人の前にちょこんとしゃがみこんだ。そして、ソファアに座る先輩たちを見上げる。

「じゃあ、私本気でアプローチしちゃっていいってことよね？」

無邪気な、きらきらと輝く、罪のない瞳。

その言葉を聞いた瞬間、何故かフェリアの胸のうかが激しく波打った。

隣の親友は「いいんじゃない？」と面倒くさそうに應對している。フェリアも乗り遅れてはいけないと慌ててそれに同調したが、波打つ心臓を止めることは出来なかった。

あんな男はやめた方がいい。後悔する。いろいろと安っぽい言葉が頭を過ぎり、そのまま素通りしていく。心の中にもやもやと得体の知れないわだかまりが浮かんでは消え、消えては再び浮かぶ。その正体はフェリアにも不明である。

アンナは「やった！」と悪戯っぽく笑うと、足取り軽く部屋を出て行った。フェリアは複雑な心境のまま、ただただ床を睨みつけていた。

気付けば、本番まであと一時間を切っていた。余計な話をしていたために仮眠をとる時間もなくなってしまったらしい。

フェリアは溜息を落とした。あんな男に酔いしれるアンナの心がわからない。自分の心に浮かぶわだかまりのこともよくわからない。だが、おそらくあの男が全て悪いのだ。可哀想なアンナが振り回されているのも、自分の心が穏やかでないのも、こんなに体が疲弊しきっているのも、それなのに仮眠時間がなくなってしまったことも、

全てあの男のせいだ。フェリアは心の中で毒付いた。それが八つ当たりであることに、彼女は気付いていない。

空に銀鉤の月が浮かんでいる。表通りならば活気もあり道を照らす明かりもあるうが、建物を一つ挟んだ裏側には、心許ない月明かりしか光源が存在しなかった。

その日の演目が終わると、フェリアは着替えもせずに劇場の裏へと回った。裏門に続く湿っぽい道には、ほとんど誰にも使われていない鉄のベンチが放置されている。隣の宿舎と接近しているその狭い空間には、ベンチを一つ置くのが精一杯で他には何もない。日当たりは悪く草木も生えないため、余計に陰湿な雰囲気をもたしめていた。

今頃楽屋の中は着替えたり化粧を落したりする女たちで溢れかえっていることだろう。常であればフェリアもそこに混ざっているのだが、今日はあの混雑の中で後始末をしたくなかった。少し待てば空くだらうと見越して、しばらく楽屋からも離れた劇場の裏側で休憩することにしたのである。

予想した通り路地には人っ子一人いなかった。フェリアは衣装の裾に泥が跳ねないようにとスカートを持ち上げる。石の道を通って鉄のベンチの前まで行くと腰掛けた。布越しでもひんやりと冷たい感触は、あつという間に体温と同化していく。酷い倦怠感により脳が活性せず、フェリアはぼんやり虚空を見つめた。

考えなくてはいけないことがたくさんある。例えば、スールイ公に西へ行こうと誘われたことや、可愛い妹分であるアンナのこと。また、考えたいこともたくさんある。明日の舞台へ向けての自分なりの反省点や、いかにして親友ベラとの口争いに勝つかなどだ。だが、頭が働かない。無意識に口を開くと、歌が溢れた。彼女にとって歌うことは息をするのに等しく自然な動作なのである。人前で歌うためだけにこの声は存在しているわけではないと教えてくれたのは誰であったか。

?? お前の歌は人を救う。

かつてそう言ったのは、フェリアの父ラドレスサだった。ただ歌うだけという動作の中にかなる救いがあるのかフェリアは未だに答えを見つけ出せてはいないが、実際に彼女の歌を聞いて「救われた」と口にする者は少なくなかった。誰もが彼女の歌に恍惚と聞き惚れる。??あの男を除いて。

今宵の舞台の上から見ても、ナイザーの姿はやけに目立っていた。他の客の全てがフェリアの歌を聴いている時に、彼だけはフェリア自身をまっすぐ見捕える。鋭い視線に貫かれるような気がして、どうにも落ち着かない。そのせいでフェリアは二、三個ミスをした。劇全体に関わるほどの大きな過ちでなかったから良かったものの、客からの視線に気が散ってミスをするなどという屈辱は初めてであった。その原因がああ男だということがさらに、腹立たしい。

フェリアは心に渦巻く恨み言が口から出て行かぬようにと歌を止めた。彼女は始めた歌は歌い上げると自分の中で決めており、滅多に途中でやめることはなかったが、今ならば不自然に消えていく旋律を聴いている者は自分以外にはおるまい。と、油断していたため、不意に路地の奥の物陰から響いた声に仰天した。

「??やめてしまうのか?」

全く予測していなかったために、自ずと体が震えた。声の発生源を探して右へ左へと頭を巡らせていると、くくと厭味な笑い声がする。同時に、建物の設計の誤りで出来てしまったような小さな隙間から、男が出てきた。

「ただでプリマの歌が聞けるとは儲けものだと思んでいたのだが」

丁度頭に思い描いていた相手だっただけに、動揺を隠せない。

「淮尉……どうしてこんなところに?」

だが、それ以上にこの路地裏に潜んでいたことに驚愕していた。劇団の者さえないと思っていたのだから、当然のことである。そもそも、此処はグロピウス座の私有地だ。どうやって入ってきたのだろう。

「……今は、面会禁止の時期よ。それに、劇場の裏側への一般人の立ち入りは禁止されてるはずだけど」

「そのようだな。それでもプリマに会いたいという男たちが、裏門の前にうじゃうじゃとたむろしている。さすがにプリマドンナの人氣は著しい」

かけらの誠意も見えない応対に、苛立ちが募る。フェリアは自分の胸の内を落着けながら平常心を失うまいと、緩やかに足を組んだ。これ以上この男のペースに巻き込まれるのは御免である。あくまで、自分はプリマとしての余裕を保たなくてはならない。

「?? 准尉も私がお目当て?」

「俺が?」

「わざわざ劇場の私有地まで忍び込んだりして。そこまで熱意のあるお客様は初めてよ」

「おや、意外だな。度々あるのかと思っていたが」

「まさか。貴方が第一号よ」

「それは期待を裏切って申し訳ないな」

「期待ですって……?」

「残念ながら、今日はプリマがお目当てではない。生憎、女に不足はしていないもので」

「……そうでしょうね。じゃあ今日は何? どこかの貴族のお嬢様に劇場の裏側を視察してこいとても懇願されたのかしら?」

「今日は一人できたんだよ。君の元のソプラノ歌手から熱烈な誘いを受けてね。こっそり中へ入れてもらったわけさ」

「まあ……」

アプローチすると断言したアンナの姿が脳裏に蘇った。彼女の行動力の旺盛さには呆れるばかりである。フェリアが注意しようとも直らず、グロピウスが叱ろうとも反省しないのは、本人にその気がないためだろう。フェリアは頭を抱え込みたくなった。

「……で、そのアンナは?」

中まで侵入できた経緯はわかったが、肝心の犯人が見えない。訝

るような視線を向けると、ナイザーも困惑したような表情を見せた。

「終幕してすぐに裏門から入れてもらったのはいいが、しばらくしたら裏門の前にプリマのファンが集まってしまってた。出ようにも出られんのだ。彼女が他の出口を探しに行ってくれている」

裏門以外の出口は、表の正門かも知しくは丁稚がゴミの出し入れなどに使う小さな木戸しかない。正門から出るわけにはいかないだろうし、アンナはゴミ出し用の木戸の様子を見に行ったのだろう。汚らしい木戸をくぐってこそそと出て行くナイザーの姿を想像し、フェリアは思わず笑ってしまった。なんとも間抜けな風体である。これで少しは溜飲も下がるというものだ。

「准尉ともあろう方が、ざまあないわね。ご愁傷様」

「何、おかげで劇場の裏を見ろという貴重な経験をさせてもらったし、プリマの鼻歌を拝聴できたからな。安いものだ」

皮肉は安々と受け流される。ますますフェリアの機嫌が傾いていくのを知りながら、男は屈託なく笑った。結局、フェリアは彼の調子に飲み込まれていく。自分の意思でなく相手の都合の良いようにもてあそばれるのは望むところではなかった。負けるまい、とフェリアは毅然とした態度を固持し続ける。腕を組んで壁際を睨み上げると、面白そうに歪められたナイザーの目と視線ががち合った。

「……女には不足していないんでしょう？ それなのにアンナに手を出す必要はないんじゃないんですか？」

「おいおい、勘違いしてくるなよ。手を出したのは向こうだ。俺はその手を取ったまで」

「同じことよ。軽はずみな気持ちなら近付かないでと言ってるの」「おや、プリマが恪気か？」

「ふざけないで！ あの子に本気なの、そうじゃないの？」

「可愛い女だと思うよ。俺には勿体無いくらいだ」

「それ、答えになってないわ！」

フェリアは息巻いて、立ち上がった。そこまで向きになる必要は

ないだろうにと呆れる心がある一方で、怒りを止めることも出来ない。ナイザーはこちらを見て興味深そうに微笑むのみである。その態度が彼女の神経をますます逆撫でしていく。

激昂し、何かを甲高く叫ぼうと口を開いたその時、ナイザーの後ろ側より小さな影が飛び出してきた。

「准尉……！」

暗く湿った空間の中でも、明るく爽やかさを失わない少女の声である。目映いほどの笑顔を称えて現れた少女は、そこにフェリアの姿を見つけると、小首を傾げた。

「あれ、フェリア……？」

フェリアは思わず、アンナから視線を逸らした。自分には関係のないことなのに、必要以上に熱くなってしまったと反省する。他人の口出しするところではない。アンナの問題なのだから、彼女が解決すればいいのだ。

「……出口は見つかったかい？」

きょとんとしていたアンナであるが、ナイザーに声をかけられるとすぐに目映さを取り戻した。自分より幾分も背の高い相手を見上げてにっこりと微笑んでいる。

「ええ……！ 汚らしい木戸になってしまって、申し訳ないんですけれども……」

「構わんよ。それもまた一興」

「准尉はご寛恕の深い方ね、本当に……！」

アンナは嬉々としてナイザーを連れ木戸の方へと向かっていった。ナイザーもそれに従い、二人はフェリアの方を振り返ろうとしないう。その姿が建物の角を曲がって見えなくなると、取り残されたフェリアはずんと重たくなる頭を片手で支えた。首をぐったりとうな垂れると、足元がふと目に映る。あれほど気をつけていた衣装の裾が、泥に濡れていた。我を失って激昂などしたからである。

フェリアは首を横に振った。自分はどうかしてしまったのではないだろうか。調子が狂っている。これは、いつもの自分ではない。

（楽屋へ、戻ろう）

かなり時間は経ったはずである。今戻れば楽屋もすっきりしているだろう。

休憩をしに此処まで出てきたはずだったのに、疲労は溜まっていくばかりであった。肩が重い。だが、何より頭が痛い。熱でもあるのだろうかと思つて額に手を当ててみたが、特に異常は見られなかった。

まっすぐと目的地を向かうと、期待した以上に空いていた。残されているのは脱ぎ捨てられた衣装ばかりで、人影はない。着替えが済むなり、皆寢床へ戻ってしまったのだろう。それぞれ連日の舞台とりハーサルに疲れているだろうから、無理もなかった。

フェリアは化粧台の一つを選んで椅子を引くと、腰を下ろした。ゆらゆらと燭台の上の灯が揺れている。目の前にどんと聳え立つ鏡台の前に肘をつくとき、己の姿がその灯の色に染められていた。花のようなかんばせと言われるその顔が、目の前には鮮明に映し出されている。

??お母上によく似て美しい。

そう評されるこの顔を、フェリアはどうしても好きになれなかった。確かにこの顔のために得をすることもあることは認めるが、だからと言ってあの女のことを思い出さずにおれないこの顔をどうして好きになれよう。フェリアの記憶の中の母親の面影はひどく不鮮明であった。そのため、彼女の思い描く母親は、自分と同じ顔をしている。

民衆に天女のようなだと言われて愛されていた母は、心優しい若き青年作曲家をたぶらかした。彼を、騙して捨てたのだ。父と母が一緒にいた期間はわずか数ヶ月だったという。父はその間に母に一生の愛を誓い、だが、母は父に別れを告げることすらなく蒸発した。父の手元に残されたのは、生まれたばかりの娘と白く細い花束だけだったという。母は子供の面倒の一切を男に押し付け、その手向けとばかりに花束を一つ置いていった。そしてそれきり二度と、姿を

現さなかった。自らに必要なものとして、廃棄したのだ。

しかし、そんなことをされても、父は母を愛することを誓い続けた。自分の前にはいない相手を愛することはどんなに苦痛だったろう。そして最後には、戦火の中へと自ら身を投じて、消えてしまった。

「フェリア」

名前を呼ばれて、フェリアは顔を上げた。いつの間に戻ってきたのだろう、鏡越しにアンナが覗き込んできていた。

「……どうしたの、怖い顔して」

無邪気に首をかしげている少女には、悪気もなければからかいの気持ちもない。おそらく自分は恐ろしく冷淡な形相をしていたのだろうなと思って、フェリアは頬を掌で撫でた。

「……疲れてるみたい」

「毎日働きっぱなしだものね」

フェリアの隣に腰を下ろしたアンナは、鏡に向かって白粉を落とす始めた。化粧落とし特有の鼻に通る臭いがする。フェリアは自分もまだ何の始末もしていないことを思い出して、アンナと同じ薬品を手を取った。

「アンナは、元気ね……」

「恋する乙女が疲れている顔を見せるわけにはいかないでしょ？」

「恋……」

恥ずかしげもなく吐き出された言葉にこちらの方がうんざりとしてしまう。フェリアは布で顔を拭く動作をふと止め、手を台の上に置いた。先刻のアンナの様子と、ナイザーの無情な台詞たちが次々に頭の中に蘇る。頭痛がますます酷くなりそうだ。

「……本気なの？」

恐る恐る問いかけると、

「もちろん」

何の恐れもない答えが返ってきた。フェリアの中を、複雑怪奇にさまざまな感情が駆け巡っていく。自分でも整理できない流星のよ

うな感情たちをなんとか押しとどめようと布を持ったまま拳を握り締めれば、布に浸した薬品が指の合間から滴り落ちていった。

「やめた方がいいわ」

咄嗟に口をついて出た言葉に、我ながら驚いていた。

「アンナのためにならないもの」

?? 私は何を言っているのだろう。

フェリア自身にも理解できない感情が言葉になって溢れていく。自分で自分を傍観しているような気分になった。まるで体の中に自分が二人いるようだ。

隣にいる少女もフェリアの突然の苦言にきよんとしていた。

「……どうして？」

「愛なんて、所詮まやかでしょう？」

「フェリア」

「何をどうしたって、実体はないのよ。見えない何かに翻弄されて、傷つくことがあっても得られる物なんて何もないの」

「フェリア……そんな悲しいことを言わないで」

「悲しいことなんて何もないわ。私は真実を言ってるだけよ」

「でも、すごく悲しそうよ、フェリア」

「私が……？」

自分を指差し首を傾げると、アンナは小さく頷いた。

目の前の鏡に映る自分は、そんなに悲愴な顔をしているようには見えない。だが、何かを思いつめていた。まるで何者かに追われているように、焦っている。

「フェリアも、恋をした方がいいわ」

「恋? 私……？」

「ええ。そしたらきっと、そんなこと思わなくなる。絶対よ」

アンナは力強く断言した。彼女は幸せそうに微笑むと、再び鏡へと向かった。その幸福そうな面差しは、フェリアには決して真似できない物である。?? 眩しいのである。晴れ渡る夏の日に、肉眼で太陽を仰ぐような苦痛を感じてしまう。目が眩み、しばし言葉もな

くす。

フェリアには、アンナが日常的に語る「愛」というものがさっぱりわからない。これが愛なのだと信じられる物など何一つなかった。

フェリアに言い寄ってくる男たちは、舞台の上で歌うプリマドンナとしてのフェリアに幻想を抱いている。フェリアはそれを瓦解させることなく演じきり、そこに愛の生まれようはずもなかった。

フェリアの母は誰のことも愛さなかった。人々に慕われる身でありながら、己は誰にも手を差し伸べなかった。一度は伴侶になった男にすら、そして自分の娘にさえも。

そしてそんな母を十年かけて追いかけた父の姿にも、フェリアは愛を感じるなどできなかった。彼は母を追うために命を削り、十年も苦しみ続けたのだ。それは愛というより、呪縛である。彼女を愛し続けると誓った彼の心は、単なる呪詛でしかない。

人は何の目的か、恋をする。それはやがて呪縛となりその人間を殺してしまう。心を引き裂き、肉体を衰えさせやがては死に至る呪いだ。??ならばそんなもの、最初からなくしてしまえばいいのだ。愛など存在しないと声高らかに言い切ってしまえばいい。

フェリアはそう固く信じていた。そのはずだった。

それなのに、時折明るく輝くアンナを羨ましく思うのは矛盾しているのではないだろうか。彼女のことを眩しいと思い、彼女からは悲しそうな顔をしていると言われる。どうして存在しないものに縋る彼女を羨み、存在しないものを切り捨てた自分が悲しげに映るのだろう。

フェリアは手に握り締めていた布を、台の上に置いた。その上に腕を組み、額を乗せる。唐突に机に突っ伏したフェリアを「大丈夫

？」とアンナが気遣ってくれたが、大丈夫と返す余裕がなかった。つまり、大丈夫ではなかった。

酷く頭が重い。内側から外へと響くような頭痛がする。間々思いつかれる男の顔が、憎くて仕方ない。忘れてしまえばいいのに、どうしてわざわざ思い出してまで憎む必要があるのだろう。

?? いっそ、一思いに殺してやりたい。

この時フェリアは初めて他人に殺意を抱いた。あれだけ恨んでいた母親にさえ、芽生えなかった激情を生まれて初めて経験した。

これがわだかまりの正体だったのだ、とフェリアは自分なりに結論付ける。二十年生きてきて、こんな感情を抱いたのは初めてなのだ。突然現われたあの男に、何もかもを奪われてしまう気がする。

?? 私は、あの男を殺してしまいたいほど憎んでいる。

誰もが花のようなかんばせだと称したその顔に、修羅の影が映った。

6、踊り子ペーラの暇つぶし

その日の北国ラウグリアには、珍しいほどの篠付く雨が降っていた。

雨の下、首都エルヴァを闊歩する男がいる。男は、若い娘と逢瀬を繰り替えていた。娘と会っては愛の抱擁をし、抱擁をした後に愛の囁きとともに白い花束を贈る。白い花束を受け取った娘は恍惚とした眼差しで花を見つめ、やがて男と別れた。別れた男は次の娘との逢瀬のために、雨の中を移動した。

男は幾度も幾度も逢瀬を繰り返す。彼は、よもや自分が誰かに睨みつけられていようとは、夢にも思わなかった。そして男を睨みつけていた女は、やがて我慢ならなくなったのか、男を追って雨の中へと飛び出した。人知れず、冷たい雨の中での鬼事が始まった。

さて、そんな女たらしの男のことも、鬼事を繰り広げる女のことも知らないペーラは、自分の所属するグロピウス座の劇場の窓から、雨の降りしきる首都エルヴァの街を眺めていた。

新しい演目が始まってから一月が経ち、本番トリハーサルを繰り返す生活はひとまず終わった。面会禁止も解かれ、劇場では平坦な日々が続いている。そろそろ季節は秋に変わり、まだ残暑が厳しいとは言え雨が降ると途端に涼しくなった。もとよりラウグリアの夏はそう長くもなければ暑苦しくもない。そして冬が他の何処よりも長い。故に、戦が始まった。

ついに、ラウグリア軍は西の国境線を破ったという。戦場から隔離された首都エルヴァでは、そう有名な話ではない。平和ぼけした市民たちは自分の国の置かれている状況すら正確には知らないし、

知りたがらない。

その中で、ベーラは異端だったと言えよう。常に情報網を貼っている彼女の耳にはいつでも最新の情報が届けられていた。それでも軍が国境線を破ってから五日近く経っていたと言うことから、いかにエルヴァが戦場から離れているのかよくわかる。

ベーラの情報網は、劇場を中心に外へと広がっていた。彼女は劇終了後の面会の相手を直感で決める。仲間はそれを不可思議だと笑うが、どれもこれも似たような物なのにそこから一つを選ぶ方がベーラにとっては不可思議に思えた。そうして出会った相手とは、とにかく世間話をし続けるような心がけている。普段どちらかと言えば口数の少ないベーラが必死に話を紡いでいると知ったら、それこそ不可思議だと仲間たちは目を丸くするだろう。しかし、そうでもしなければ相手の握っている情報量は掴めない。つまり、ベーラは一晚語り明かせばその人間がどの方面にどれほどの広さ、あるいは深さで情報網を張っているか大方予測できた。そして使えると思った相手とはこまめに連絡を取り合うようにしている。

そうまでして彼女が情報を欲しがる理由は、特にはなかった。強いて言えば、暇だった。

ベーラは自分自身のことやその近辺のことにはさして興味がない。代わりに、自分ひとりでは決して見ることの出来ないような世界の情勢を見渡すことを好んでいた。一度その楽しみを味わってしまうと、自分の周囲のことなどあまりにも小さくてどうでもよくなってしまうのだ。

?? ついにラウグリアが、西の国境線を突破した。

その情報も、ある人にとってはこの上なくどうでもいいことかもしれないが、ベーラにとっては久しぶりに得た興味深い話題であっ

た。何しろ、ラウグリアが西国エウリアに攻め込んで約三年弱、東西南北の中で最も繁栄していると言われるエウリアの護りを崩すのは容易でなく、両者は国境辺りで膠着を続けていたのだから。

ラウグリアの国土面積は四カ国の中でも最小で、総人口も最少であった。当然兵卒の数も少なく、東に続いて二番目に国土の広い西に武力で適うべくもないと思われていた。その常識が、長い歴史の中で始めて覆されたのである。そして恐らくその勝因は、ラウグリアが軍国になりつつあることと、それでも軍が皇室を手放せない理由にあると思われた。

??ラウグリア国の皇室には、軍が自力では決して手に入れることの出来ない最強の武器が眠っているに違いない。

これは、ベーラの勘であった。軍人の知り合いは多いが、残念なことに皇室に関係のある人間との関わりはない。軍人たちはほとんど国を単独で指揮しているようなもののに、皇室のことは全くと言っていいほど知らなかった。あるいは知っていても、話せないのかもしれない。どちらにしても、王宮の中には何か隠し玉が眠っているはずだ。

ベーラは覚えず口元を緩ませた。戦を楽しむわけではないが、少なくともしばらくは退屈せずに済みそうである。劇場の正門が見える窓辺に寄りかかり、人知れず不適な笑みを浮かべた。

「ひどい雨だな」

不意に現れた中年の男が、ベーラの脇に立って外を見下ろした。窓に映った姿は、黒い正装姿である。劇場の中で働いている男は少なくないが、その中で気軽にトップダンサーに話しかけることが出来るのは、座長ただ一人であった。

ベーラは相手の顔を見上げるのが面倒だったので、彼の足元を一瞥する。決して安物ではないズボンの裾が、わずかだが雨水に濡れていた。

「このひどい雨の中、外にいたの？」

一目で言い当てられたことにグロピウスは面食らったようだった。ベーラがズボンの裾を示して種明かしをすると、「適わないな」と首をすくめる。そして茶目っ気たっぷりに目を細めた。

「裏門に、どうしてもプリマに会いたいと言って動かない男がいてな」

「会わせてあげればいいじゃない」

「そういうわけにいくまい。男がどんなに一方的に願っても、女の了承がなきゃ入れないのがうちの指針だ」

特にこだわりのないフェリアなら、余程気分が乗らないという以外であれば、相手が誰であろうと了承するのではないかとベーラは思ったが、いちいち反論するのも面倒だったので適当に頷いておいた。

「てこでも動かんの、追い払った」

「座長自ら？」

「うちの女優は売女ではない、と一喝してきたよ」

自慢気に笑う座長を見上げ、すぐに窓の外を眺めた。雨が小道に小さな川を作っている。この分では今日の客数は普段の半分程度かもしれない。

「ところで、うちのプリマを見なかったか」

どうやら本題はそれらしい。グロピウスを含め、何かと皆はフェリアの居場所をベーラに聞いてくるが、いくらベーラがフェリアの親友だからと言って常にフェリアの居場所を確認しているわけではない。「見てない」と短く答えると、グロピウスは困ったように「そうか」と呟いた。急用のようだ。

「……また、スールイ公がフェリアをお呼びなの？」

グロピウスは片方の眉尻をくいと持ち上げた。

「何故、そう思う？」

「直感」

「……勘の良いことだ」

凶星だったようである。グロピウスはため息を交えながら、顎髭を撫でた。

「公爵が話を持ちかけてくるのはいつでも直前だから……なるべく早くフェリアに伝えたいんだが」

「うちの役者は売女ではないんじゃないの？」

すると、心外だと彼の顔が歪む。

「私はフェリアに強制してるつもりはない。それにいわゆる娼婦のような仕事をしているわけでもなし」

「そう。??でもグロピウスにとって、フェリアは売り物なんじゃないの？」

「何を言う」

「いつまであの子を此処に縛り付けるつもり？」

「どうということだ」

「貴方、本当はフェリアのお父様がどうなったか知ってるんじゃないの？」

ベーラはグロピウスの目を覗き込んだ。彼は眉間に皺を寄せ、わずかだが身を後ろへ引く。

「……そんなわけないだろう。私には、ラドレッサが戻ってくるまであの子を此処で保護する義務がある」

「??そう」

ベーラは頓につまらなさそうに視線を外した。窓に額を押し付けて、それ以上は口を開かない。グロピウスも他に言いたいことはないらしく、口を閉ざしたまま窓辺を離れていった。

ベーラは滅多に表情が変わらない。??本人にそんなつもりはないのだが、周囲はそう口を揃える。??そのため、第三者がここにいたとしても、彼女の心情の変化には恐らく全く気付かなかっただ

ろう。だが、彼女は動転していた。

?? 実は、グロピウスはフェリアの父の行く末を知っているのではないか。

これはベーラにとってはほんの冗談のつもりであった。しかし、親友であるフェリアのよく言うように「ベーラの冗談は冗談に聞こえない」らしい。鎌をかけられたと勘違いしたグロピウスは、ほんの刹那のことであつたが、動揺を見せた。そしてそれをベーラは見逃さなかつた。

フェリアは、他の踊り子や歌手とは少し劇場での立場が異なつてゐた。ベーラを含め多くの女たちは身寄りがなかつたり、親に売られたりしてこの劇場に住み着く。彼女たちにとっては、ここが自分の家であり、他に帰る場所はない。だが、フェリアの場合は、座長と親しくしていた父親が、一時的に娘を預けただけのこと。おそらくフェリアの他の出演者たちへの態度に礼儀がないのはここに起因している。?? ベーラなどはそれが逆に心地良いのだが、多くの女たちには反感を買つてゐた。?? つまるところ、フェリアはいつでもこの劇場を抜け出して構わないのである。彼女は父親を待つという名目で、此処にいるだけなのだ。

そして、グロピウスは、十年以上音沙汰一つなかつたフェリアの父の行く末を知つてゐる。ベーラは先刻の一瞬で、確信した。

おそらく、音沙汰一つなかつたわけではないのだ。グロピウスが、父からの連絡を遮断してゐたに違いない。だとすればその内容いかんによつては、フェリアが此処にいる意味はなくなる。それどころか、此処を出て父に会いに行くことだつてできるかもしれないのだ。

ベーラは、自分自身のことやその近辺のことには滅多に興味を示さない。だが、今回は例外であった。多くのことに無関心であるとは言え、ベーラとしてこの十数年フェリアがどれだけ父親の帰りを、連絡を心待ちにしていたか知らないはずがない。この件を見逃すわけにはいかなかった。

しかし、真実が鮮明には見えない今、あまり騒ぎ立てるのは望ましくない。特に、フェリア本人には伝えるべきではないだろう。正確な情報は人を混乱させるのみで何ら利益を与えない。

ベーラは重たい瞼をゆっくり持ち上げた。しばらくは世情よりもフェリアの父について中心に、情報収集に徹することを決意した。己の情報網ならば、どんな深部まで掘り下げていくことも可能だと自負している。

窓の外の雨脚は強くなっていく一方であった。この雨の中、渦中のプリマドンナが人知れず外出していたことなど、情報通のベーラですら知らない。

彼女は窓の外を滴り落ちる雫の痕を指先でなぞった。

真相を調べて突き止めるというのはどうしてこんなに面白いのだろう。

久方ぶりの胸がはずむような感覚に、彼女は一人微笑んだ。

7、白い花束

その頃、親友の決意など露知らぬフェリアは、雨水から庇護される劇場や宿舎の中にはいなかった。

ラウグリアの雨は冷たい。

フェリアは身震いをして、頭から被ったマントの裾を両手で引き寄せた。自室から取るものもとりにあえず出てきてしまったから、大した防寒具も纏っていない。財布すら持っていなかったため、どこかの店で雨宿りも出来ず、馬車を呼んで帰ることもできない。とにかく屋根のある場所で少しやり過ごそうと、フェリアは辺りを見回した。此処も都の一部であり、建物はずらりと軒を並べている。屋根がないわけではないのだが、入るのを思わず躊躇してしまうような柄の悪い輩があちらこちらを徘徊していて、なかなか落ち着けそうな場所がなかった。

??それもこれも、あの男が悪いのだ。

フェリアは本日何度目かの八つ当たりを心の中で吐き出す。それが不毛であるのは明白だったが、そうでもして怒りを燃やさなければますます寒さが募る一方であった。

時は、遡る。

フェリアが劇場を飛び出したのは、この日の正午前であった。役者たちの朝は遅い。昼間よりも夜が中心の仕事であるため、致し方ないことである。昼前までは、皆眠っているか起きてもぼんやりしていることがほとんどだ。フェリアも例に漏れず、すでに世間の人々が活発に動いていようとも、まだ起きたばかりではつきりしない頭を支えながら宿舎の自室から外を眺めていた。

朝も早くから世間は騒がしい。軽快な人の流れをぼんやりと見つめていると、まどろみの中へと引きずり戻されそうになる。それを欠伸で必死に振り切っていると、人波の中に、彼の姿を見つけた。

若い風体でありながら、どこことなく威厳のある空気をばらまき、きちっとした優等生的な軍服の着こなしをしながら、歩き方はどことなくあくどい。そして茶色の癖のある毛が、この雨の湿気を吸って余計にあちらこちら跳ねていた。

准尉、とフェリアは口の中で呟く。この時もまだ彼女の脳は活性化していなかった。

フェリアの部屋は宿の三階にある。ゆえに見下ろす視線になるため、歩いている人々には見えない道全体を見渡すことができた。

ナイザーは知らない女と肩を並べて歩いていた。彼は女に白い花束を渡すと、それから数歩進んだところで別れた。二人は違うそれぞれ方向へ向かって歩き始める。女の方は王宮の方へと続く道へとまっすぐ進んで行きナイザーの方は、グロピウス座の劇場へと足を運んでいるようだった。

劇場は当然ながら、まだ開いていない。一体何をしに行くんだろうという素朴な疑問を抱いたのも束の間、フェリアは劇場の入り口にアンナの姿を見つけて、はっとした。不鮮明であった意識が一気に透き通る。一瞬で目が覚めたようだった。

アンナはナイザーの姿を見つけるなり、駆け出して抱きついた。ナイザーは慣れた手つきでそれを受け入れ、アンナの前に白い花束を差し出す。アンナは嬉々としてその花束を受け取っているが、フェリアはその花束に見覚えがあった。

(……さっきの女に渡したのと、同じやつだわ……!)

たった数分前までは他の女に会っていた身で、次の女との逢引を果たし、二人に同じ花を渡すのか。あの男は、町中の女をたぶらかして花束でも配るつもりか。

そう思ったら、勝手に体が動いていた。眠っていたときのそのままの格好の上に外出用のマントを被り、外へと飛び出す。いつものフェリアなら、どんなに不愉快な思いをしようとも後先考えず宿舍を飛び出すようなことはしない。この時はそれを許してしまうほどの憤怒に駆られていた。我を忘れさせるほどの怒りが彼女を包み込

んでいた。??そしてここから、フェリアとナイザーの鬼事が始まった。

劇場の正門から街路に出ると、すでにそこにアンナとナイザーの姿はなかった。フェリアは標的を探して辺りを見回す。ややあって、通りを抜けた向こう側に、男の姿を見つけた。アンナはいない。代わりに、また見たこともない女が傍にいた。ナイザーは例に違わず白の花束を渡している。そんなにいくつもの花を何処に隠し持っているのだろうか考える暇もなく、肩にかけた布の鞆が目に入った。あれに入れて持ってきたに違いない。

いつの間にか、ナイザーはその女とも別れていた。フェリアははっとして、はぐれてはいけないとナイザーの後を追った。しかし、標的の足はなかなか速く、この人込みの中をすいすいと泳いでいく。負けじとフェリアが人をかきわけていると、雨が降り始めた。フェリアはマントを頭から被り、劇場に戻ろうとはしなかった。それがいけなかったのだと気付いた時にはすでに遅い。何故そこまで向きになっていたのか、今となってはフェリアにもよくわからない。瞋々のうちに、知らない土地まで来てしまっていたフェリアは、一人で戻ることもできずに途方に暮れていた。歩いてきたのだから、歩いて帰れる場所ではあるはずなのだが、此処はいったいどこだろう???

エルヴァには色々な町並みがあった。一口に都と言っても、フェリアの住まうような劇場の立ち並ぶ歓楽街もあれば、城へと続く大通りもある。そしてフェリアが今紛れ込んでしまったのは、貧困層の住まう裏町だ。フェリアは一度もこの辺りに足を運んだことがなかった。貧しい者たちだけでなく、この辺りには軍人も貴族も来たがらないことを知ってたむろしている柄の悪い輩が多々いるためだ。

フェリアは連中と目を合わせないようにして、マントのフードを深く被った。八重雨にさらされ、体温はますます下がっていく。ナイザーを追っていたらここまで来てしまっていたわけだが、この通

りに入るなり彼を見失った。一体此処まで奴は何をしにきたのだろうか。こんなところにまでも花束を渡すべき相手がいるのだろうか。

雨に濡れながら理性を取り戻し、冷静になって考えてみると、自分の取った行動は奇怪以外の何でもなかった。よしんばナイザーに追いつき、彼と女が密会しているところへと飛び出すことができたとして、自分はどうするつもりであったのか。アンナをからかうなと言うつもりか、多数の女に手を出すなど言うつもりか。何にせよ、フェリアの口を出すところでもなければ、そんなことをしている自分の方が惨めになるような光景だったに違いない。そんな恥辱を味わうくらいなら、見失ってしまつて正解だったかもしれないなど前向きに考えて、フェリアは劇場へ戻ることにした。自分のいる位置が正確にわかるわけではないが、同じ都の中なのだ。歩いていればそのうち辿り着けよう。

しかし、今すぐにといいわけではない。強くなつていく雨脚に、どこかで休息を取りたいという自然な願望があった。どの軒下にも出来れば関わりたくないような連中が雨宿りしながら馬鹿笑いなどしていたが、背に腹は変えられない。目立たぬようにしていれば問題はないだろうと、フェリアは薄汚れた矮屋の軒下に隠れた。雨は滝のように、地面を叩き続けている。この中を帰るのは無理だろうと改めて判断し、フェリアはフードを脱いだ。マントの裾を絞ると、たっぷり水に浸した雑巾のように雨水が零れる。深くフードを被っていたはずなのに、彼女の綺麗なブロンドの毛先からも雫が滴っていた。拭く物を持っていないので、詮なく、手で払うだけで済みます。

屋根の下にもぐりこんだことで雨露をしのぐことはできたが、今度は動きを止めたことにより足元から体の髄が凍りはじめた。フェリアは両手で自分の体を抱きしめる。くしゃみを一つ落とし、濡れたマントを引き寄せた時、ふと、肩を叩かれた。振り返れば、大柄な男が立っている。

「??? ほうれ、見ろ。俺の言つたとおりじゃねえか」

初めて見る男であった。自分に会話を投げかけられたのかと思いきや、男はフェリアには一瞥もくれず、連れのもう一人の男と会話をはずませる。両者とも大柄で、お世辞にも清潔とは言えない服装をしていた。咄嗟に嫌悪が走ったが、彼らはこの町には調和しており、どちらかと言えばフェリアの方が異端であった。

「げっ、本当だ……こいつぁ、グロピウス座のプリマじゃねえか。俺も一度だけ見に行ったことあるぜ」

「んなこたぁどうでもいい。俺の勝ちだ。掛け金払いな」

フェリアは目を見開いた。どうやら、男共はフェリアを賭けの対象にしていたらしい。職業上、見られることには慣れているはずであったが、至近距離でならず者に囲まれた経験などなかった。じろじろと体を舐めるように見られ、自ずと顔がひきつる。

「しっかし、なんでこんなところにプリマがいんのかな？」

「どうでもいいから金を寄越せ」

「そんなんは後でもいいじゃねえか。こいつぁ千載一遇のチャンスだぜ。何しろ、このプリマは高い金はたかねえと面会すらできねえってんだから」

「ほお……？」

男たちがますます鼻面を近づけてくる。フェリアは本能的に身を引いた。こういう時に、どうすればいいのかわからなくてさっぱりわからない。少女の頃から歌うことばかりを習ってきた身で、ならず者の扱い方なんて知る由もなかったのだ。

逃げろ、と脳が危険信号を上げる。しかし体は竦んでしまっただけじゃない。来るな、と声にならない悲鳴で拒絶をしようとしたら、男たちに腕を掴まれた。大人しく逃がしてくれる気など毛頭ないらしい。

今まで経験したことのない猛烈な恐怖に襲われ、顎が震えた。がちがちと歯が音をたてる。そしてもう駄目だと彼女が観念した、その時である。

「プリマ……こんなところで何をしている」

聞き覚えのあるその声に、つい先刻までは散々悪態をついていたはずだ。だが、この恐ろしい状況では思わず安堵してしまった。ならず者に晒されるのと、彼に見つかり屈辱を味わうのと、今は天秤にかけるまでもない。

男たちは同時にその方角を見やった。忽然と姿を見せた青年は、この上なく険しい表情をしていた。男たちはその軍人姿を見やって、訝る。国にはびこる軍服も、此处で見るのは珍しい。

「……そうか、プリマはあんたが此处まで連れ出したのか」

「ここは軍人さんの来るとこじゃあないぜ？」

フェリアは彼に連れ出されたわけでもなんでもなかったが、青年は不快そうな顔をしただけで否定はしなかった。

「別段、軍人であろうとプリマであろうと、この土地を出入りするのに許可などいらんはずだ」

彼は颯爽と言い放って、男どもに囲まれたフェリアの腕を掴む。強引に引っ張られた二の腕にはあざが出来るのではないかと思えるほどの痛みが走ったが、今はそれですらフェリアの意識を恐怖から背けてくれた。

そのまま男どもには一瞥もくれずに軍人はフェリアを連れて去ろうとしたが、荒くれ者たちがそれを黙って許すはずもない。彼らは互いに目を交わして、何か企みを思いついたように不吉に笑った。

「おい、軍人さんよ??プリマとこんなところまで来るってこたあ、お忍びだろう?」

「軍に知れたらえらいことになるんじゃないのか? 条件次第では、黙っておいてやっても……」

彼らの下卑た笑みは、しかし続かなかった。青年の腰に差された刀が鞘ごと動き、疾風の速さで一人の鳩尾を打つ。打たれた男は低音で呻きをあげると、耐えられぬとばかりにその場に腹を抱えてうずくまった。

「黙っておいてやっても……なんだ?」

青年は鞘を逆手に握ったまま、うずくまる男を見下した。その隣

に茫然と立ち尽くす男にもちらりと視線を投げかけると、男は蛇に睨まれた蛙のように飛び上がる。おそらく彼には軍人の鞆の動きすら見えなかったに違いない。

「俺は准尉だ……この町で不法に跋扈するお前らをここで斬捨てようと十分大義名分は立つ。が、貴様らを殺したところでなんの勲章も得られんからな」

殺されたくなかったら大人しくしていると、無言での圧力が彼らの上へと重くのしかかる。そのまま一步も動けなくなってしまった男どもを尻目に、彼は歩き出した。「来い」と短くはき捨てられた言葉は、間違いなくフェリアへ向けられたものである。殺気すら感じられる彼についていくのもまた、それはそれで恐ろしい気がしたが、此処に一人取り残されるよりは随分ましだった。

雨が地面を打つ音に混ざって、一連の動きを傍観していた遠くのならず者たちの小声の囁きが響いてくる。

「??あれ、ナイザー准尉だぜ。あいつに関わるとろくな目に遭わないらしい。噂で聞いた」

全くその通りだ、とフェリアは心中で大きく頷いた。

彼に関わると、ろくな目に遭わない。

ナイザーは無言のまま、軒下をくぐりぬけて汚らしい路地裏へと入り込んだ。来いと言ったからにはフェリアをどこかへ誘導するつもりなのだろうが、一体こんな陰気なところに何があるのだろうかと疑わずにはおれない。建物の裏側へと回ると、足元には白いカビが生えていて、思わず進むことを躊躇した。しかし、その間にもナイザーは大股で進んでいってしまふ。

「ちよっと、准尉……!」

慌てて声をあげると、彼は後ろを振り向いた。そして自分とフェリアとの間に随分距離があることに気付き、顔をしかめる。

「??早くしろ」

正直、その声色に驚愕した。フェリアの中にあるナイザーという人物像は、何があっても皮肉を飛ばす余裕を崩すことはなく、怒りなど見せない得体の知れぬ男であった。まさか、彼がここまで感情を露にして不愉快を表に見せることがあるとは予想も出来なかったのである。

しかし、こちらの事情も気遣わず、主我的に進んで行ってしまふ彼の態度に、フェリアとて腹を立てていた。確かに、先刻助けてもらったことには感謝するが、もともとあのような不貞の輩に絡まれたのだって、この男が原因なのである。もしもこの男が誠実で、決してフェリアの妹分をたぶらかすことなく、フェリアの機嫌を損ねることなく生きていたなら、フェリアはこんな目には遭わなかった。そう思うと、自然に怒りがこみ上げてくる。

フェリアは地面を這うカビのことなど忘れ、プリマとしての姿勢すら思いつかず、大股で歩み始めた。その大胆な一步一步に憤怒が竦る。

ようやく前を歩く男のもとへと追いつくと、彼はさび付いた金属の戸を開いた。誰も使っていない廃屋なのではないかと思われる建物の裏口で、正直その中に何かがあるとは思えない。それでもナイザーは迷うことなく扉を開き、中へ足を踏み入れた。

「おい、親父、何か拭くものを??」

ナイザーが誰かに話しかけている声が聞こえる。こんな荒れ屋の中に誰かいるのだろうかと首を傾げつつフェリアが中を覗き込むと、外見よりは綺麗な装いが見えた。とは言え、壁には無数にひびが入り、部屋の隅には埃が溜まっている。ひび割れた床下からは鼠が頭を覗かせていたが、人の気配を感じると再びその隙孔の中へと逃げこんだ。

フェリアは咄嗟に口元を抑えた。今まで経験したことのない不潔さに、拒否反応が起こる。彼女はまさか、劇場の裏に通じるゴミ捨て場以上に汚い場所があるとは思っていなかったのだ。

「おう、オレークじゃねえか。久しいな」

一際大きなひびわれの穴から顔を出したのは、鼠ではなく人間であった。老人であると思っていたスールイ公よりもさらに年を取っていて、髪の毛はすでにない。しわだらけの顔にさらにしわを作って笑うと、あちらこちら欠けた歯が見えた。

「なんだ、また女を連れ込んだか」

「外がひどい雨なんだ。なんでもいいから拭くものを寄越せ」

「ほほう。こりゃ、すげえな、今までん中でも一番の上玉じゃねえか」

「拭くものを寄越せと言っている」

「そう怒るな……」

老爺は不気味にくくと笑うと、穴に潜って何やら布を取り出した。それをフェリアへと投げて寄越し、再び穴から飛び出してくる。

「汚えとか文句言うんじゃねえぞ。これでも洗濯はしとる」

フェリアは黙して手の中にある布を見つめた。ところどころ茶色の染みがあり、手触りも何故だかざらついている。劇場の床を拭く雑巾でもこれよりは清潔であると思ったが、髪から滴り落ちる水は絶えることがなく、やむを得ずにその布を使うことにした。

「親父、奥の部屋空いてるか」

「空いてるぞ。なんだ昼間からちちくる気か」

「少し黙っててくれないか。俺はこれ以上プリマの機嫌を損ねたくないんだ」

その台詞に反応し、フェリアは顔をあげた。ナイザーは自分を不機嫌にするために行動しているのではないかとすら彼女には思えていたが、そういうわけではないらしい。確かに、ここでフェリアがこれ以上機嫌を損ねて面倒を起こしたらナイザーにとっても不都合なのだろう。せめて雨の上がるまで、二人で行動を共にしなくてはならない。

ナイザーはさび付いた冷たい石の壁に備え付けられている金属の取っ手に手をかけた。よほど重いのか、渾身の力を込めて彼はそれ

を後方へ引く。そうして初めて、フェリアはそこに扉があることを知った。穴しかない部屋だと思っていたのだが、どうやら奥へと繋がる出入り口があるらしい。

ナイザーはなんとか人一人分通れるだけの隙間を作って、フェリアに合図をした。顎先で中へ入れと示してくる態度は気に食わないが、彼の両手はふさがっているので大目に見てやろう。寛大な心でそう受け止めて、フェリアは奥の部屋へと足を踏み入れる。窓一つないその空間は、天井に一つ通気孔があるのみで、どことなくかび臭かった。

8、『力』

フェリアは暗澹とした部屋の中で目を凝らし、なんとか中の状況を見定めようとしたのだが、光のない場所では限度がある。その直後に、金属同士がぶつかる轟音がしたかと思うと、唯一の光源のあった入り口も塞がれ、一切の明るさが消えた。一瞬、暗闇の中に一人きりで閉じ込められたのではないかと謂れのない不安に駆られたが、すぐに解消される。シュツと何かをこする音がして、橙の光がやみの中に浮かびあがった。揺らめく橙は移動して、ランプの中へと落ちる。炎が勢いよく立ち上がり、部屋の中が明るくなった。

石造りの四角い部屋で、先の部屋と同じように壁には無数のひびが入っていた。が、こちらには崩れた跡も穴もない。完全なる密室の中には石で作られた冷たそうなベッドと、木造の小さな椅子、そしてランプとランプを置く小さな机しかなかった。ナイザーはランプを拾い、机の上に置く。彼はフェリアを木の椅子に座らせると、自分は石のベッドにと腰掛けた。はぁ、と吐き出されるため息が嫌に重厚である。彼は膝の上に肘を付いて手を組むと、鋭い視線をこちらへ投げかけた。

「お前……いつから俺をつけていた？」

はっとフェリアは息を呑む。尾行しているつもりはなかった。だが、それなら何をしていたのかと問われると答えることができない。彼女にも、自分が何をしているのか理解できていなかった。尾行していたのだと思われても仕方ない。しかし、それを認めるのは、プライドが許さなかった。

「つけてなんか、ないわ……」

「では、こんなところまで何となく散歩にでもきたというのか？ その格好で」

体裁のことを指されると、フェリアは言葉に詰まってしまう。ほとんど寝巻きに近い状況で外に出ることがまず有り得ないというの

に、そのままの格好で得体の知れぬ町にまで迷い込んでしまった。それほどまでに取り乱していた自分を叱咤したい。何故、そうまで必死であったのかと。

「別に……あんたとは関係ないわ」

それでも言い返したのは、負け惜しみのようなものである。それをわかっているためだろう、ふんとナイザーは鼻で笑って立ち上がった。

「俺だって、関係などなくしてしまいたいさ。しかし、お前には俺のことを忘れさせることが出来ないからな」

その言い草に、かっと頭に血が上った。フェリアも思わず立ち上がる。

「己惚れるのも大概にしてくれる？ あんたと私は何も関係なんてないわ。私は私の歌を崇拜してくれる人たちのために存在しているの。あんたなんかはその辺の虫けらと同じよ」

さすがに過言ではなかうかと理性がどこかで語りかけてくるが、一度堰を切った言葉は止まらない。ナイザーは当然、不快そうな素振りを見せた。軍服の裾をひらりとなびかせて、こちらに背を向ける。吐き出される言葉は氷のごとく冷たい。

「気位の高いことだ。その自尊心に身を焼かれぬよう、せいぜい注意することだな」

彼が繰り出したその氷の塊は、フェリアの胸を直接貫いた。胸の奥が痛み、息が苦しい。喉が渴いてひりひりと悲鳴をあげた。ぐつとフェリアは奥歯を噛み締める。そして次の瞬間には、体が勝手に動いていた。??ナイザーへと背後から飛び掛り、その腰刀に手を伸ばす。鞘から引っ張り出した抜き身を握り締め、刃をナイザーの首に当てた。

「うわっ、何をするんだ……!」

普段の彼からは想像も付かないような裏返った悲鳴があがる。突然のことにさすがのナイザーも吃驚したらしい。フェリアは柄を握ったまま、震える声を絞り出した。

「そうよ、その通りよ……私は矜持ばかり高いプリマだわ。だって仕方ないじゃない。親が残したこの顔で、親がくれたこの声で、誰も彼もが私の言うなりよ。思い通りにならないことなんてなかったわ。??そんな私が本当に欲しい物がやっとか、わかった気がする。教えてあげようか」

「格別、知りたいとは思わないが、この状況で逆らう気も起きんな……なんだ？」

「准尉、あんたの命だわ。そうだわ、私、あんたの命が欲しかった……。何もかも私の思い通りに行くはずなのに、どうしてあんただけは私の思うとおりにいかないの？」

「何……？」

彼を殺してしまいたいと願ったのは、これが初めてではない。自分でも押し留めることのできない殺意は、ゆっくりフェリアのことを蝕んでいた。そして今、目的を果たそうと思えば出来るところまで来ている。それなのに、腕には力が入らない。

小刻みに震える手で刃を当てたナイザーの首筋が、くっく音をたてて振動した。それは幾度も震えて、やがて、笑い声とともに大きく揺れる。フェリアは呆気にとられ、なんとなく身の危険を感じて刀を引っ込めた。その手を、男は逃すまいと掴む。

「??それは、愛の告白か？ 嬉しいな……」

「なにを、言ってるの……そんなわけないじゃない」

「一つ忠告してやろう。嘘はよくない」

「は……？」

「が、どうしても嘘をつく必要があるのなら、もっと上手くやることだ」

ナイザーはフェリアの正面を向いて、にやりと笑った。いつも見る、人を小馬鹿にしたような笑みだ。見慣れた微笑を前にして、全身から力が抜けていくのを感じた。するりと手から落ちた刀が甲高い音をたてて石の床と衝突する。ナイザーはそれを拾い上げて、鞘にしまった。

「何もかも自分の思い通りになったと？　それは虚言だろう……本当は、何一つ思い通りに行かないものだから、君は常に穏やかでいられないんだ」

「はあ？　そんなわけじゃない」

「そうか、なら少し言葉を違えたのかもしれない。正しくは、君は確かに思い通りに事を運ぶ能力を持っているのに、自分が何をしたいのか全くわからずに、その力を持て余しているんだ。まさに宝の持ち腐れというやつだな」

「宝……」

「君は、自分が本当に何をしたいかわかっているのか。俺を殺したいと本当に思ったか？　殺意を抱くのとそれを実行しようとするのでは勝手が違う。君は実際のところ、自分が何をしたいのかわかっていない。それに、自分が何を持っているのかも、わかっていないんだ」

フェリアは返す言葉を完全に失った。何かが、頭の中で氷解していく。先ほどフェリアのことを貫いたその声で、彼女の心を溶かしていく。先程まで渦巻いていた激情はどこへ行ったのやら、心の内が空っぽになった。

遙か遠い昔から、フェリアは自分の中にしこりを抱いていた。父を待つために此処にいるのだと言いながら、本当はどうして自分が此処にいるのかわからない。歌が好きだから歌うのだと言いながら、本当はどうして自分が歌っているのかわからない。欲しいものは何でもあげようと周囲が口を揃えるものだから、思いつく物を片っ端からねだり続けた。そのうちにこちらが何かを望まなくとも物は溢れんばかり、フェリアの周りを埋め尽くす。だが、いまいち釈然としない。フェリアが求めているのは、これではない??。

「そうよ、私は何でも持っているようで、何も持っていないの……。いえ、違うわ……何かを持っているはずなのに、何を持っているかわからない。日々歌うだけの毎日で、私には何も見えない……」

独り言のように呟くと、「そうか」と相槌が聞こえる。それを合

図にすっかり脱力しきったフェリアが膝から崩れそうになると、ナイザーが手を差し伸べた。彼はフェリアの体を引きずって、木椅子の上に座らせる。そして自分もベッドの上に戻ると、自身を落ち着けるように一つ深呼吸した。

「……仕方ないな」

そして、口を開く。

「観念しよう……。お前には、俺の知っている限りを話す」

「え……？ 何を……」

「俺の、知る限りだ。君にこれ以上隠していても仕方ない。？？君には、力がある」

何度となく聞いたことのある一句に、ごくりと唾を飲み込んだ。どうやらそこにはフェリアが思う以上に深い意味があるらしい。ナイザーは「軍の最高機密事項だ」と付け加えると、嘲笑めいた表情を浮かべた。いつになく真面目な話し方をされて、フェリアも思わず姿勢を正した。

「？？この世界には、『力』を持つ人間とそうでない人間とがいる。大抵の人間は『力』を持っでは生まれて来ない。生まれながらにしてそれを持っているのは、ほんの一握りだ。そして、持って生まれなかった人間はさらに、『力』を持つ素質のある人間と、全く素質すら持たない人間に分けられる。素質のある人間は、磨くことによつて『力』を開花させ、増強できる。素質のない人間は、当然何をしても『力』は生まれない」

「『力』って……？ それを私が持っているというの？」

「おそろくな。『力』は具体的にこれと言って示されるものじゃない。ただ、俺たち人間の目には見えず、どんなにその原理を考えたところでわからない得体の知れぬ何かを総合してそう呼んでいるんだ」

フェリアはかつて他でもないこの男から聞いた話を思い出した。人間離れをした人間と言うのなら、あれもそうなのだろうか。

「じゃあ、獣人も……？」

「そうだな……まあ、そういうことになる。しかし、西国では獣人を『力』の持ち主とは扱わないようだ。あの国では『力』のことを巫力と呼んで、神聖なものともみなしている。その逆に、獣人を汚らしいものとして扱うからな」

「……ってことは、西の国では、『力』というものを持つ人がいるっていうのは常識なの？」

「そういうわけじゃない。巫力を持つ人間がいるという考え方は、宗教の教えの一つだからな。迷信と言って信じない人間も多い。俺とて、そうだ。『力』を持つ人間がいるなんて言われても、俄かには信じられなかった。だが、俺はあまりにも強力な『力』をこの目で見てしまったんだ……」

「あまりにも、強力な……？」

「シルディア殿下。??北ラウグリア国の、皇太子だ」

「皇太子様……？」

「そう、殿下はこの国で一番の……いや、ひょっとしたらこの世界で最も協力的な『力』の持ち主かもしれない」

ナイザーはそっと目を伏せた。灰色に近い黒の瞳の中では、ゆらゆらと橙の光が反射して輝いている。

「そもそも、この国はほとんど軍に食われてしまっていると言って過言でないのに、何故軍が王室を追い出さないかわかるか？」

そういえば、そんな話をかつてフェリアは親友から聞いたことがあった。今の軍の権力をもってすれば、王政に変わって軍政を布くことも可能なのに、軍が王室を破棄しないのには、それなりに理由があるはずである。王室には軍だけでは取り揃えられない何か重要な物が眠っているに違いない、と。

「……その、皇太子様がいるから？」

答えを探るように顔をあげると、ナイザーは頷いた。

「その通りだ。??どんな軍力をもってしても決して敵わない、強大な『力』だ」

彼はどこか遠くを見つめるような眼差しで、語り続けた。フェリ

アは真剣にその目を見つめ返す。いつのまにか悪寒はしなくなり、震えも止まっていた。抜け切った力も徐々に戻りつつある。

「初め、軍は皇太子を暗殺することも考えたそうだ。巨大な力はいずれ軍に刃向かうようになるかもしれないからな。……だがしかし、相手が未知数の力を持っているのに、闇雲に戦うわけにもいかない。そこで、考えを改めた。彼の力を軍の一部にしてしまおうと思ったのだ」

「ああ、それで……」

フェリアの頭に、再びベーラの顔が浮かぶ。以前、彼女は不思議そうに呟いていた。ラウグリアの軍は他国と比べてそれほど大きいわけでもなく、屈指の戦力があるわけでもない。それなのに何故こうも戦に強いのだろうか。運がいいんじゃないの、とその時フェリアは大して気にも止めていなかったが、これがその答えなのだろう。

ナイザーがそれを受けてそうだとまた一つ頷いた。

「軍は、超人離れたした殿下の力を利用している。そしてまた、軍の最高指揮官にはなるべく力を持つように仕向けたんだ」

「仕向ける、なんてことができるの？」

「最初に言ったろう？　素質のあるものとなないものがあるんだと。素質があれば、磨くことによってある程度は力がつく」

「ある程度……」

「そこで生まれる個人差はたぶん、備わっている素質の違いなんだろうな。お前の素質はなかなか光るようだぞ。何しろ国中でお前の名を知らぬ者はいないのだからな。？？だがしかし、素質ではなく『力』そのものを生まれ持った者はまるで格が違う。殿下が、それだ」

「そんなに、凄いの？」

「凄いななんてものじゃない。俺は、殿下が人をはるばる遠くから召喚したのを見たことがある」

「召喚……？」

「相手は西の国にいた。それを、ラウグリアの城の中へと一瞬で引き寄せたんだ。空間のずれや、時間のない世界を利用するんだそう。正直、俺には何だかさっぱり理解できんがな。??これが、今起こっている戦争の発端だ」

お前はこの戦争の起こった原因を知っているか。かつてのナイザーの問いかけが脳裏に浮かんだ。

「軍が、皇太子に命令し、西エウリア国の要人を召喚、もとい誘拐させた。当然、エウリアは激怒してこちらへ刃を向ける。そして今に至っている」

「そんなことが、あったなんて……」

「民衆のほとんどが発端を知らんからな……。それどころか、軍の中でも皇太子の『力』のことを知っているのはごく少数だ。何せ『力』のことは最高機密だ」

「それがわからないわ。だって軍は『力』とやらを利用しようとしているわけでしょう？ それなのにどうして民衆にはその存在を隠すの」

「民衆が『力』を持ったら困るからさ。一重に『力』と言っても、さまざまな物がある。軍力では、それに太刀打ちできん」

確かに、時空間を操ってしまえるような人物とどうしたら対等に渡り得るのだろう。??そこで、きとフェリアは思い出す。この男はフェリアにその『力』があると言わなかったか。

「そもそも、『力』を持って生まれた人間など、今の世では皇太子の他にいるかどうかも怪しい。ならば、『力』の存在さえ知られなければ、磨かれることもなく、軍は独自にそれを利用することができる」

「准尉……じゃあ、私は」

「うん？」

「私は、どうして『力』を持っているの……？」

「??ああ」

ようやく思い出したようにナイザーは頭を上げた。

フェリアには、『力』というものを磨いた記憶もなければ、それを持っているという自覚もない。それどころか、そんなものがあるということすら今しがた知ったばかりで、俄かには信じられぬというのに。

「君の場合は、歌を歌うことによって、無意識に磨きをかけたんだろう」

「そんなことで磨かれるんだったら、うちの劇場の子たちはみんな『力』を持ってるわよ」

「素質がなかったんだろう。それに、単に歌を歌えば磨かれるというものでもない。君がよほど歌に執着していたのも要因の一つだな」

「執着ですって……？」

「執着していたんだろう？」

フェリアの眉がぴくと震えたのを見て、ナイザーは軽々しく笑った。足を組んで、腕も組み、口元に微笑みを称えた姿は馬鹿にされているようで気に入らない。

「君は、自分には歌しかないと思っていたんだ。だからその若さでプリマの座を手に入れるほどまで成長し、同時に自分の意思とは別のところで『力』を開花させた。そうとは知らぬ人々は、プリマの歌に魅了され続けている。お前の歌には『力』がある」

同じ台詞を、そう遠くない過去にも聞いた覚えがある。一体いつどの状況で誰に言われたのかまでは今思い出せないが、それよりも彼の言葉の端々が気になって仕方なかった。

「それはつまり、もしも私に『力』の素質がなければ、プリマにはなれなかったってこと？」

「そういうことだ」

飄々と言つてのけた男をこれでもかというくらいにねめつけると、彼はフェリアを落ち着けようと両手を掲げて見せる。

「そう怒るな？。プリマは客席の俺を見たときに何度か違和感を覚えたことがあるんじゃないか？」

「それは……」

初めてナイザーを見つけた時、変な男がいると思ったことをフェリアはしかと記憶していたため、一度身を引いた。そもそも、あの時抱いた違和感がなければフェリアはこの男の名前すら知らなかったかもしれないのだ。

他の客たちはフェリアの歌に聞き惚れてどこを見ているのかもわからないような虚ろな眼差しをしている中で、彼だけは他の誰でもないフェリアだけを貫くような視線を向けてきた。まるでフェリアの歌には興味がないかのように、ただ舞台上にいる彼女だけをじっと見つめていた。

「……俺には、これがあるからな」

ナイザーは軍服の上着のボタンをはずすと、内側のポケットを探る。そして差し出された彼の手には、漆黒の石が握られていた。どこにでも落ちていそうなただの石に見える。しかし彼はそれを宝物を扱うような仕草で握りしめ、再び内ポケットの中へとしまいこんだ。

「これを持っていれば、ある程度の力の干渉は防げる。自分に『力』が備わっているならこんなものを持つ必要もないらしいが、俺にはないから」

「……貴方には、ないの？」

「ない。ある方が珍しいんだぞ。だから、この石を持っている」

「それを使って、私の歌を跳ね返していったってこと？」

「まあ、そういうことになるかな」

ナイザーは上着のボタンをかけ終えると、再び腕を組んだ。

「俺の見解では、一番手っ取り早い『力』の磨き方は、孤独になることだ」

「孤独……」

「寂しいと思ったり、そのせいで誰かを憎んだり、愛情を欲したり、虚無感に包まれたり、そんな負の感情がより『力』というものを研ぎ澄まします。俺が今まで会ってきた力の持ち主たちは皆、心に孤独を

抱えていた」

なんとなく心当たりがあり、フェリアは口を閉ざした。父の他に身寄りはなく、人に頼ることも知らぬ身でたった一人置いてきぼりを食らった時の苦しみを、今でも痛いほどに覚えている。それを抑えて大丈夫いつか戻ってくるからと自分に言い聞かせることすら辛くなった頃には、すでに達観していた。私には歌があるからそれでもいいじゃないか、と、歌に執着することで孤独を乗り越えようとしていた。

悔しいが、この男の言うことは全体的を射ている。彼はかつてフェリアのことを無知だと言って呆れたが、実際にこの男はフェリアの比べ物にならないほどの知識を持っているのだろう。どんなにむきになって反抗しても、彼の余裕を崩せないはずである。まるで次元が違うのだ。??だが、一つだけ納得のいかないことがある。それを最後の抵抗として、フェリアは彼に厳しい目付きを向けた。

「随分とわかりやすい解説をありがとう……でも、どうして貴方がそんなことを知っているのかしら？」

彼は、これを軍の最高機密だと言った。准尉というのは、軍隊の中ではそう高い位でもないはずだ。その上、自分自身が『力』を所持しているわけではないという彼が、どうしてここまで詳細なことを饒舌に喋ることができるのだろう。

すると、ナイザーはここにきて初めて言いよどんだ。それまでの勢いが嘘のように、しぼんでいく。まさか全て嘘だったわけではあるまいかと疑うと、その心を読み取ったかのように「嘘ではない」と低く呟いた。やがて、意を決したように息を吸う。

「俺は、もともと軍人だったわけじゃないんだ」

その真意をはかりかねて目を細めると、彼は吸った息を吐き出した。

「俺は、皇家に仕えていた。世話役と言えればいいかな」

「誰の……？」

「皇太子、シルディア殿下だ」

「え……」

「とは言っても、ほんの数年のことだったがな」

突然の告白に、フェリアはきよんとする。それまでの話も充分驚愕すべき内容であったが、それ以上に返答に窮した。ナイザー自身についての出で立ちを初めて聞いたためかもしれない。彼は、いつも人の事情には無遠慮に足を踏み込んでくるくせに、自分についての一切を話さなかった。彼の一言一句に苛立ちを覚えたのは、彼の全てが不透明だったことにも一因があったに違いない。それは得体の知れぬ物への威嚇に似ていた。

「?? 皇家の世話役というのは、誰にでも任せられるものではない。しきたりも常識も何もかもが下界とは違うから……。俺は、そういった皇家の人間の世話をするための教育を受けて育った。しかしまさか、自分に皇太子の付き人を任されるとは思ってもいなかった。そんな大役は引き受けられないと一度は断ったが、他に人がいないんだと半ば強引に任命されて……。後でその理由がわかったよ。あの方の付き人は、どんな役職よりも難しい。逃げ出したくなるんだ、あの人の傍にいます」

「『力』が強いから……?」

「違う……孤独が強いからだ。あの方を取り巻く孤独が、あまりにも強すぎて……。俺は結局逃げ出してしまった」

ナイザーはそう呟いて、額に手をあて俯いた。それは罪人が懺悔する姿に酷似している。彼は自らの左胸に手を当てて、その内側にある石を撫でた。

「この石をくれたのも、殿下だった。彼は、自分の傍にいますと力の影響で具合を悪くするかもしれないから、と言ってこれを俺に託した。だが、防ぎきれなかった」

その顔には自嘲の笑みが浮かび上がる。

「その後逃げるように皇家を飛び出して、軍隊に志願し、この国というものがやっと見えるようになった。国を支配しているのは、この俺ごときがたった二年で准尉に上り詰めてしまうほどの弱小軍隊

だ。まさか他国を侵略できるわけもない。それなのにラウグリアに勢いがあるのは、殿下の御力のためなんだ。このままでは、ラウグリアはいずれ滅びるぞ。殿下の孤独に国ごと食われるか、殿下が命を落として他国に報讐されるか、どちらが先かはわからんがな」

彼の目にはすでに自嘲の色は浮かんでいなかった。あるのは追い詰められたような焦慮の色のみである。

「??俺は、この国を守りたいと思っていた。それが殿下に報いる最後の好機だと信じていたから……」

決意を表明するように真摯に伏せられた目は、嘘をつく時のものではないと思われた。しかし、それでも腑に落ちないのは何故だろう。フェリアは膝に抱えた布を握り締める。

「じゃあ、聞くけど……そのために、貴方は何をしていたというの？ 私にはよくわからない……。貴方はただ、女と遊んでいるだけの、遊び人のようにしか見えなかったわ」

ナイザーは厳しい声を受けて驚いたように顔を上げ、やがて険しかった表情を少し和らげた。何故ここで微笑むのだろうとフェリアには頃には理解できない。彼は遊び人と言われても嫌な顔一つせず、思い出したように笑った。その裏にある思いは、計り知れない。

「どうしても、欲しい情報があつたんだ……そのために駆け回っていたが、決定打が見つからない。俺には時間がなくてな……もう無理だと半ば諦めていたところなんだ」

「どうして……?」

「今日から五日後には、俺は西へ派遣される。平和な都で、もう劇の鑑賞なんてできなくなるからな……」

フェリアは、言葉を今度こそ完全に失った。

西エウリア国は、今では最も過酷な戦場だと言っていたのはベールであつたか。ラウグリア軍は西の大国を相手に苦戦を強いられており、東を占領した時とは比べられないほどの犠牲を出すだろうとは、物知らずのフェリアですら耳にしたことがあるほど、

有名な話であった。

背筋が一瞬で凍りつく。父が軍に志願したと聞いた時と似て非なる衝撃であった。父の時は、一人ぼっちにしないでほしいという自分本位の悲しみばかりが渦巻いたが、今は何だろう。この男は本当に死ぬかもしれないんだと思った瞬間に、頭を鈍器で殴られたような感覚が走った。

二の句を継げずにいるフェリアの心境など知らず、当のナイザーは軽く笑っていた。

「プリマと必要以上に関わりを持たない方がいいとは最初から思っていたのだが、いつも上手くいかなくて……。結局こうやって何もかも吐露してしまっているのは、ひょっとしたら最後の好機なのかもしれない」

彼の言う意味を理解できない。彼の笑う神経も理解できない。今にも泣きそうな顔をしているに違いないフェリアを見て、彼は何を思ったのだろう。

「一つ、教えてくれ？ お前の歌に『力』があると再三言って止めない人物が、俺以外にいないか？」

顔を下から覗き込むようにして、聞かれた問いに、フェリアは反抗できそうにはなかった。いつだってそうだ。フェリアがどんなに抗おうとしたところで、いつでもこの男の手の上であがいているだけなのである。

「……いるわ」

それでも最後の一線だけは越えまいと、涙を堪えた。毅然とした態度で、相手を睨みつける。

「スールイ公よ。アナトリー・ヘルム公爵。うちの劇団の後援者よ」

「……そうか」

「私の歌には『力』があるから、と。私を西の国へ連れて行こうとしていたわ」

「……なるほど」

ナイザーは今までで一番低い声色で呟いたきり、緘口した。難しい表情をしてはいるが、今までとは違ってほんの少し明るみが差している。おそらくフェリアの言葉の中に、欲しかった情報とやらを見出したのだろう。フェリアは静かに瞑目した。

決して他言はならぬとスールイ公に散々口止めされた事項であった。

自分はスールイ公には逆らうことは出来ないだろうと思っていたが、それは単に逆らう気がなかったためだったのかもしれない。そんなことをしたところで意味がないから、と投げていただけで、自分の劇場のために従順になっていたわけでもなんでもなかった。そうでなければ、スールイ公とは比べるべくもないほど付き合いの浅いこの男に、こうも簡単に情報を引き渡すものか。

いつのまにか長いこと話を続けていたらしい。フェリアは自分の頭髮に触れて時間の経過を知った。水に漬かったかのごとく重たくなっていた髪は、今ではすっかり乾ききっている。櫛を一度も通さずに自然乾燥させた髪は絡まりあって、プリマとして他人に見せることの出来ないような形を作っていた。だが、それすら気にならぬほどに、胸の奥が苦しかった。

今目の前にいる男の瞳には、フェリアには決して見えぬ物が映っている。その視界の中に、フェリアなど髪の毛の一筋もないに違いない。

それが苦しいのか、何が苦しいのかもわからず、とにかくフェリアはその男を見つめていた。

決してこちらを見ることのない瞳を、穴の開くほど見つめ続けた。

雨は止まない。今にも崩れ落ちそうなこの檻樓屋の屋根をこれでもかというほど叩いて耳障りな騒音を立てながら、いつまでもラウ

グリアの地を叩き続けていた。

9、激震

――今日から五日後には、俺は西へ派遣される。平和な都で、もう劇の鑑賞なんてできなくなるからな……。

その言葉が、その言葉を語った男の顔が、脳裏に焼き付いて離れない。他にもたくさん、フェリアの持っている『力』、その『力』ゆえにプリマになったこと、強大な『力』を持つという皇太子殿下、そして戦を続けるラウグリア国のこと、衝撃的な事実はいくらでもあったはずなのに、何故だろう、頭に浮かぶのはその言葉と、彼の顔だけだ。

俺には時間がない、と彼はそう言った。そう、もう時間はないのだ。もう数日もすれば、あの男はこのラウグリア国の国土からいなくなる。二度とこの国には帰ってこないのかもしれない。下手をしたら、この世に帰ってこなくなってしまうのかもしれない。あの男の一挙一動にいらだつこともなくなる。客席から見つめられて歌を間違ふこともなくなる。なにもかも――なくなる。

頭を破裂しそうなほどの強烈な悩みを抱えて、悩み抜いて、惰性の毎日はまだ過ぎて行き、彼が西へ旅立つという日が刻一刻と迫っていた。

そして、変化が見られ始めたのは、あの大雨の日から三日後のことであった。

変化と言っても、ラウグリア自体を揺るがすような大きな物ではない。民衆の多くはその変化を知らないだろうし、知ったところで興味を示さなかったろう。だが、グロピウス座には、甚大すぎるほどの衝撃を与えた。??グロピウス座を後援していたスールイ公が暗殺された。

丁稚がその知らせを運んできた時、最初に発狂せんとはかりに動揺したのは、劇団長のグロピウスであった。

「どういことだ……っ？ 暗殺、暗殺だと？ 死んだというのか？ スールイ公が……？ 何故だ。誰によって、何のためにっ？！」

「私も、都の役人より情報を得ただけですので、詳細はわかりません……が、何者かによって殺されたと」

スールイ公には息子がおらず、世継ぎがない。そのため、公爵の地位は宙に浮く。必然的に、グロピウス座への後援も途絶えることとなった。それは劇団にとっては死活問題であった。

明らかな情報不足により、グロピウスは混迷状態に陥った。その日も当然ながら劇場の公演のなくなるわけではない。すでにチケットは売れてしまっている。しかしながら、グロピウスは劇場の指揮を取れるような状態ではなくなった。劇場自体が混乱に見舞われた。

「グロピウス……このままでは埒があかないわ。直接スールイまで行って、スールイの役人に話を聞いてくるべきよ」

劇団の誰も彼もが混乱に陥っている中で、そう冷静に助言したのは、トップダンサーのベーラであった。彼女はーひよっとしたら動揺しているのかもしれないがー表面上ではこれっぽちの動揺も見せず、凜として助言した。

「ただ殺されたのでなく暗殺ということは、何か裏に大きな思惑が隠れているかもしれないということよ。軍が一枚噛んでいるのかもしれないわ。……だとしたら、情報は遮断されて私たち市民には入ってこない。軍の管轄下にはないスールイ公の知己の役人に話を聞いた方がいい。軍からの口止めが入る前に、なるべく早くね！」

まくしたてたベーラの持つあまりの説得力に、誰もが圧倒された。

もとより、聡明で他のただの踊り子と比べると異彩を放っていたベールであるが、その真の實力は緊急事態下においてようやく露見される。

「しかし、しかし……私がいなくなったら、この劇場の指揮は、誰が……」

口ごもった頼りにならぬ劇団長を見下ろして、ベールは威風堂々と言いつつ放った。

「グロピウスが戻ってくるまでは、私が代行するわ……私はもう何年もこの劇団でトップダンサーをしているのだもの。劇団の経営如何は全て把握しているわ」

これで他の女がトップダンサーであったなら、「踊り子ごときに経営がわかるものか」と一蹴されたところであろう。しかし、この女にはそれが許されるほどの覇気があった。それは、彼女が常日頃から蓄積させてきた恐ろしいほど多量の情報網の成せる技だ。

それからグロピウスがスールイへ旅立った数日間のみ、劇団はベールの指揮下に置かれた。

これは彼女にしてはとても珍しい行動であった。ベールは聡明であるが、目立つことを好まない。物事を上から見渡して達観することが趣味である。自らが指揮を取ろうとすることは、滅多になかった。

グロピウスは旅立つ時に、指揮官となったベールに、劇場の全てを管理する親鍵を預けた。これを使えば、劇場のいかなる扉もベールの自由に扱える。

ベールが柄でもない行動を取ったその動機がまさかこの親鍵にあるとは、誰も気付かなかった。後援者をなくし、団長までもが役に立たないこの状況で、誰もがベールを頼るしかなかったのだ。誰もが彼女の言う事に素直に従った。

そしてまた、この劇団の看板である、プリマドンナのフェリアも、親友の抱えている本意には気付いていなかった。しかし、フェリアの場合はこの劇場の混乱に我を失って冷静さを欠いていたというわ

けではない。スールイ公暗殺の報を受けて、フェリアの頭をよぎったのは一つの記憶のみであった。

「ーひとつ、教えてくれ。お前の歌に『力』があると再三言っ
て止めない人物が、俺以外にいないか？」

「スールイ公よ。アナトリー・ヘルム公爵。うちの劇団の後援者よ。」

その質問を投げかけてきたオレーク・ナイザー准尉は、「俺には時間がない」と言った。その時のフェリアには彼が何を焦っているのかなんてわかる由もなかった。だが、もし、ナイザーが「誰か」を暗殺しなくてはいけないとして、その暗殺しなくてはならない「誰か」を必死に追っていたのだとしたら。ー彼に答えを与えたのは、フェリアだ。

しかし、不思議なことに、フェリアの心には少しの罪悪感も浮かばなかった。いや、後ろめたさが全くないと言ったら嘘になる。スールイ公はフェリアにも良くしてくれた。とてもお世話になった人物だ。彼個人の死を悼む気持ちはある。ーだが、フェリアにとっては、この劇団の行く末などどうでもよかった。それよりもずっと気になることがある。

この暗殺を企んだのかもしれない、男のことだ。

ベーラの名采配によって、なんとか劇団は団長のいない中での公演を無事成功させた。しかしさすがにこの状況下での面会は自粛して、女たちはぞろぞろと疲弊しきった顔のまま宿舎へと帰って行った。

フェリアも彼女たちの後を追おうとして、しかし足を動かすことができなかった。考えることが多すぎて、頭がおかしくなりそうだ。あの男だ。あの男が来てからというものの、全ての歯車がおかしな方

向へと動き始めている。一体全体、これから何が起ころうとしているのだろうか。

フェリアは誰もいなくなった楽屋の窓辺に立って、閉じきられた窓を開いた。冷たい北風が外から吹き込んでくる。まだ季節は秋であるが、夜はとてつもなく空気が冷たい。

「――フェリア」

窓辺にたたずむフェリアに気付いて、楽屋へ戻ってきたのは、

「アンナ……」

彼女の妹分であった。

アンナは魂の抜けきってしまったようなフェリアを見上げて、労りの表情を浮かべる。がちゃん、と楽屋の扉の閉まる音がした。アンナはゆっくりとフェリアの方へ歩みを進めながら、戸惑うように視線を迷わせていた。言葉を選んでいようだった。

「フェリア……元氣を出して、っていうのは、難しいかもしれないけれど……」

アンナはフェリアの前で足を止めて、言葉も止めた。何と言ってよいのかわからない、と言った具合だ。

フェリアは彼女を見下ろして、目を細めた。――嗚呼、そういえば、この子は、あの男に恋をしているのだった。今更ながら、そんなことを思い出した。

「そっか……アンナも、彼のことを、知っているのね」

だから、自分をいたわってくれるのだ。フェリアはそう解釈した。ナイザーは様々なことをフェリアに吐露してくれた。きつと、あの女誑しはこのあどけない少女にも五日後には西の土地にいかなくてはならないことや、スールイ公の動向を探るようなことを喋ったに違いない。だから、アンナにもフェリアの悩みがわかるのだ。

そう、フェリアは解釈したのだが。

「知っているものにも、劇団の後援者じゃない……フェリアは格別良くしてもらっていたものね。突然暗殺だなんて……気が滅入ってしまうわよね」

「え？」

フェリアは予想外の返答に、きょんとした。――ナイザーのこ
とではないのか。

「アンナ、貴女は……准尉からは、何も聞いていないの？」

その問いがひよっとしたら彼に恋をするアンナを傷つけてしまう
かもしれないものだと思いながら、しかし聞かずにはおれなかった。
あれだけ彼に執着していたアンナなら、何か知っているのではない
かと思ったのに。

一方のアンナは、フェリア以上にぽかんとした表情を浮かべてい
る。

「准尉？ どの准尉のこと？」

「准尉よ。貴女のご執心だった准尉！」

「まあ……最近私、そんなご執心になるような准尉にお会いしたか
しら……」

「ふざけないでよ、アンナ……ナイザー准尉よ。オレーク・ナイザ
ー准尉」

フェリアは、妹分が自分をからかっているのだと思った。このよ
うな状況下でよくそんな冗談を言えるなど少しだけいらだつ。だが
しかし、それに対するアンナの返答は、フェリアの予想を遥かに逸
脱していた。

「オレーク・ナイザー准尉……？ ー誰のこと？」

フェリアは大きく目を見開いた。

アンナとは幼い頃からの長い付き合いだ。彼女が嘘をついている
かどうかなんて、その表情を見れば安易にわかる。アンナの顔は、
真剣だ。ー彼女は、あれだけ執心していた准尉のことを忘れてし
まっている。

「嘘……でしょ？」

「どうしたの？ フェリア……今日はいろいろなことがあったし……
…疲れているのかしら」

「……嘘」

空いた口が塞がらない。悪い夢でも見ているような気分だ。

だってアンナは、あの男はやめろと言ったフェリアの忠告も聞かず、劇団の掟さえ破って、彼に恋いこがれていたではないか。あの雨の日にナイザーを追ったのだって、彼女があつた男にたぶらかされていると思ったからだ。そして、あの男に見つかって、そして、フェリアは彼と話をして……。

そこまで考えて、フェリアはふと彼の台詞の一つを回想した。それはあの汚らしい閉鎖的な部屋で雨宿りをしていた時のことだ。

「俺だって、関係などなくしてしまいたいさ。しかし、お前には俺のことを忘れさせることが出来ないからな。」

フェリアは、はっと息をのんだ。

あの時は、うぬぼれるのも大概にしろと彼に対して癪癪を起したものだ。しかし、その言葉の持つ意味がもし、ただのうぬぼれでないとしたら――。

「フェリア、帰って寝ましよう……そうしたらきっと、疲れもとれてすっきりするわよ」

アンナは彼のことを綺麗さっぱり忘れてしまっている。彼の記憶を、なくしてしまっている。そしてフェリアは、彼のことを忘れることができない。

一体どういうことなのだ。何が起こっているのだ。

フェリアの頭はますます混乱した。わからないことが多すぎる。ナイザーは、何をしでかしたのか。

大雨の日から三日、確かな変化が生じていた。それはフェリアの周囲を蝕んで、しかしながら彼女自身には手を出そうとしない。

それがナイザーの言った彼女の持つ『力』故なのか、なんなのか、フェリアにはまだ判断する術がなかった。

10、想い溢れて解き放たれて

スールイ公が暗殺された。アンナがナイザー准尉の記憶を失った。こんなにも大きな変化を一度に受けて、眠れるはずもない。

フェリアはその夜、一睡もできずに朝を迎えた。

昨夜はあの後、宿舎に帰りながら何度もアンナに「本当に覚えていないのか」と問いただした。しかしアンナは困ったように苦笑し「覚えていないっていうか……知らないわよ」と言うだけで、埒があかない。仕舞には「なにか夢を見ていたんじゃないの」とさえ言われた。フェリアにはもう、何を言い返すこともできなかった。

まさかあの男の存在が夢であったとは、とても思えない。夢を見ていたのはアンナの方だ。あんな得体の知れぬ男に夢を見ていた少女は、どこへ行ってしまったのだろうか。全てを本物の夢に変えて、忘れてしまったとでもいうのだろうか。

アンナが彼についての記憶を失った。そして、スールイ公が暗殺された。フェリアにはそれらの真意のわがらうはずもない。それなのに、フェリアは直感的に確信していた。??これらの変化は、あの男によるものだ。そうに違いない、と。

だが、何故。何のために。

考えることが多すぎて頭の中で氾濫し、ほとんど眠れずに過ごした夜があけ、翌朝、フェリアは無意識のうちに舞台上に立っていた。どのようにして自室を出たのか覚えていない。それどころか、昨夜アンナと別れた後から記憶は途切れ途切れであった。宿舎から自室へ戻ったのかどうかも怪しいが、寝間着を着ているからには一度自室を訪れたのだろう。

そして、いつのまにか劇場へと戻ってくると舞台の中央に立ち尽

くして、広い客席を見下ろしていた。

当然ながら人の姿はなかった。寂寥感漂うがらんどろを見渡して、フェリアはその場に崩れ落ちる。体力的にも精神的にも、限界が近かった。舞台に膝を打つ音が、やけに澄んで聞こえる。妙に研ぎ澄まされた聴覚と、夢の中をさまよっているような思考が、自分の中で反発しあっていた。自分は現実にいるのだろうか、それとも夢を見ているのだろうか。

そして舞台裏から足音が聞こえてきたのは、フェリアが此処にうずくまってしまってからどれほど経ってからのことだったのだろう。一瞬のようにも感じられたし、もう数時間が経過しているようにも思えた。こちらへ迷わず向かってくるその足音は、こつこつと冷たい。それは高いヒール特有の音で、丁稚や番頭たちの物では奏でる音ではなかった。彼らの他に劇場への自由な出入りを許されており、またヒールを普段から履いているのは出演者である少女たちしかいない。こんな早朝から誰だろうと霞む意識の中で考えていると、やがてヒールの音が舞台袖で止まった。

「フェリア」

耳に鳴れた声で呼ばれる。

「ここにいたのね。部屋に行ってもいないから、驚いたわ」

「???ベーク」

フェリアは、場内の掃除をする丁稚たちによって高く結わえ上げられた幕を片手で掴んでいる親友の姿を見上げた。幕から手を離すと暢気に欠伸などしながらこちらへ歩いてくる彼女の姿は、昨晩の舞台が終わった時のままである。さすがに衣装からは着替えているものの、スールイ公の件で忙殺されているグロピウスの代わりに客への対応をしていた時の正装のままだ。着替える暇もないほど忙しかったのだろうかと思っていると、額を小突かれた。

「こんなところで、何してるの」

「何、って……」

すぐには答えられず、フェリアは口籠った。何をしているかと聞かれても、特には何もしていない。あえて言うならしゃがみこんで考え事をしていた。それだけである。

「まだ朝日も昇ってないわよ」

こんな早朝から何をしているのかと暗に言いたいらしいが、それはベーラにも言えることだ。??いや、ベーラには仕事をしていたという立派な動機がある。そして、一方のフェリアはただ茫然としていただけだ。

「……ねえ、ベーラ……」

「うん……?」

「ベーラは、覚えているわよね? 准尉のこと……」

「どの准尉?」

観念して自分の思いの丈を話してしまおうと口を開いたが、ベーラの答えは素っ気ない。よもやベーラまで彼のことを忘れてしまったのではあるまいな、と恐ろしい考えが頭を巡ったが、その一瞬後に彼女のくすと笑う声が聞こえた。

「ごめん、覚えてるわよ。ナイザー准尉のことでしょ?」

からかわれたと気付き、フェリアは慔然とする。こちらは真剣な話をしているというのに、と苛立つ反面、フェリア以外の人間の一切がナイザーのことを忘れてしまったというわけではないと確認でき、安堵した。フェリアの渋面を見て怒らせたと思ったらしいベーラは、それでもまだ笑いながら、宥めるように言う。

「別にからかったわけじゃないわよ。私はナイザー准尉とは関わりなんてないもの。他の准尉の噂話だってよく聞くし、貴女たちみたいに、准尉と言ったらナイザー准尉、っていう不文律は通用しないの」

「貴女たちって……私と、アンナのこと?」

「そうよ。他にいる?」

問い返されて、フェリアは首を振る。必死に首を横に振りながら、自分の脇に立っている親友に縋った。

「……でも、アンナがつ……!」

「忘れてしまったそうね。准尉のこと」

「ベーラ、知ってたの……?」

「知ってるも何も、口を開けばナイザーナイザーうるさかったあの子が、突然何も言わなくなるんだもの。おかしいと思うでしょ」

「そう……そうよね」

ベーラの落ち着き払った声を聞いて、フェリアは肩の力が抜けていくのを感じた。今まで思いつめていた物が嘘のように晴れていく。そのかわりに、ぽっかりと空虚感に支配された。それをなんとしてでも振り払おうと、頭に手を置いてみたが、それだけでは息が詰まってしまう。フェリアは大きく深呼吸をして、言葉を探した。呼吸の代わりに、会話をすればいい。

「ベーラ、私……」

「うん」

「何から、話せばいいのかしら。私……」

「何でもいいわ。思ってることから話せば」

「……じゃあ……。スールイ公が、亡くなったでしよう?」

「そうね」

「あれね、たぶん、准尉の仕業よ……」

「え……?」

思っていることから話せと言われたのに、口について真っ先に出てきたのは自分の直感で得た情報であった。さすがの情報通のベーラも、これには面食らったようである。それも無理はない。あの男のことだから、暗殺すると決めればとことん隠し通してやるだろう。それにフェリアが気付いたのは、彼を暗殺に導いたのが自分の一言だったに違いないと確信したためだ。とは言え、これはフェリアの想像の範疇を出ていないはずだ。それなのにそうに違いないと断定したのは、あの雨の日のナイザーの顔が、これまでにないほど追い詰められていたからである。今思えばあの時の彼は、その後起こる事件を予想していたのだろう。

「准尉は、私たちの大切な後援者を殺したわ。准尉は、私たちの大切な妹分の記憶も奪っていった」

「それも、准尉の仕業だと……?」

「そうだと思う……いいえ、そうに違いないわ」

今度こそはつきりと断定できる、とフェリアは力強く拳を握った。

ナイザーはあの時、言った。「お前には俺のことを忘れさせることが出来ない」と。それはつまり、フェリア以外の人間になら、自分の記憶をなくさせることが出来るということだ。具体的な方法などは思いつくあてもないが、彼はその面妖な術を知っていたのだろう。実際に、アンナは記憶を失っている。

「あの男は、私から様々な物を奪っていったわ……それなのに、もうすぐ死地へ行くと言うのよ。逃げる気なの。私に仕返しの一つも許さずに……!」

ナイザーは五日後に出陣すると言った。そしてそれから四日が経っている。彼が西の国へ発つまで、わずか一日と迫っていた。

「憎いわ、彼が。誰よりも憎い。私、ずっとお母さんを憎んできたけれども、それよりも激しい憎悪の念なんて生まれて初めてよ。殺してやりたいと思った。何度も、あんな奴いなくなればいいのにと考えた、なのに……!」

鼻の奥がつんとひきつる痛みを訴える。唇がわなわなと奮え、いつもと同じ舞台の上にいるのに、おおよそ舞台上で聞かせられるような声は出てこなかった。代わりに、弱弱しく嗚咽の混じる声が響く。

「アンナが、准尉のことを忘れてしまってから、私、ずっと不安で……実は、ナイザー准尉なんて人はこの世にいなかったんじゃないかって。全て私の妄想だったんじゃないかって。いなくなればいいのか、って何度も思ってたくせに、本当にいなくなってしまったのかもしれないと思った瞬間に、怖くてたまらなくなったの」

「……あんた、言ってることが支離滅裂よ」

「わかってる。私、おかしいの」

あっさりとベーラの苦言を認めると、頼りがいのある親友は調子が狂うとばかりに肩を竦め、フェリアに並んで舞台上に腰を下ろした。そして黙って背中を撫でてくれる。母の愛を知らずに育ったフェリアにとって、三つ年上のベーラの掌が、何よりも安堵感を覚える象徴であった。

「……私、あの男を殺したいとまで思ったのよ。それなのに、いざ彼が死地にいくと聞いたたら、涙が止まらないの」

「うん」

「三日前の雨の日に、私、彼を殺そうとした。でも、できなかった。どうしても、殺せなかった。なのに、殺意が止まらない。私はどうしたらいいんだろう……」

「貴女は、どうしたいの？」

「わからない……わからないの……。私、自分がどうしたいか、何一つわからないの。それを准尉に言い当てられて、むっとしたわ。でも本当のことだから仕方ない……。私、自分がどうしたいのか全くわからない……！」

「じゃあ、仕方ないわね」

「ベーラ」

「……会いに行きなさいよ」

「え……？」

ベーラには珍しいほど遠慮がちな小声で吐き出された台詞は聞き取れず、フェリアは涙に濡れた目を上げる。涙のためか寝不足のためか歪む視界に、見慣れた顔が映った。しかし、そこには見慣れない慈愛に溢れた優しい笑顔が広がっている。

「ベーラ……？」

「フェリア、貴女は自由よ。もう、この劇場にいる必要もないの」

「え」

どういうこと、と続ける前に、ベーラによって何かが手の中に握らされた。紙のような感触の物体を確かめようとゆっくり視線を落

とすと、それは綺麗に折りたたまれた古い紙切れだった。問いかけるようにベーラの目を覗き込むと、ますます彼女の瞳は優しく細められる。

「手紙よ」

「手紙……？」

「あなたのお父様から」

「えっ……？」

心臓が突如激動し始める。短く言葉を詰まらせたきり、フェリアは絶句した。

震える指先でその手紙をなぞると、乾ききった感触が脳へ伝わる。黄ばんだその様子からわかることは、随分昔に書かれた物だということ。それなのに、フェリアはこの紙の存在すら知らなかった。

「どう、して……」

「グロピウスがね、ずっと隠していたの……」

何故それを貴女が、とフェリアが問う前に、ベーラはその疑問にも答えてくれた。

「私も何か怪しいと気付いたのは四日前なんだけどね。グロピウスの私室を探れる機会を窺ったら、丁度よくスールイ公が暗殺されるじゃない。だから、グロピウスの代理を買って出たのよ」

そうじゃなきゃ頼まれたって座長代理なんてやらない、と不躰なことをさらいと言うのはさすがである。仮にも散々世話になった公爵の死を軽く受け流すことなど、ベーラほどの図太い神経なくしては不可能だろう。

「で、昨日、客を全員帰してから今までずっとグロピウスの私室を搜索してたから、まだ一睡もしていないの」

道理で眠そうにしているわけだと他人事のように思ってから、フェリアは固まった。どうしたら良いのか、にっちもさっちもいかなくなってしまったのである。父の手紙を開くのか、それとも。

そんなフェリアの手を引っ張ったのは、ベーラであった。彼女は自分が立ち上がるなりフェリアのことも無理やり立たせて、その背

を力強く押す。

「ほら、早く行きなさい」

「でも、何処に……」

力の入らない足はもつれて二、三步進んだところで歩みを止める。当惑しながら振り返ると、両手を腰にあてたベーラが堂々と胸を張っていた。

「この歓楽街の入り口にある大きな酒場があるでしょう？ あそこ
で昨晚から今朝にかけて二日後に西へ行く軍人の出陣祝いが催され
ているの。もちろんナイザー准尉もいるはずよ」

本当に彼女は何でも知っている。

「だけど……」

それでも二の足を踏むフェリアに、痺れを切らしたようにベーラは声を荒げた。

「何を話せばいいか、何をすればいいかなんて、会ってから考えればいいことよ。もう貴女はここにいなきやいけないわけでも、お父様を待たなきやいけないわけでもないわ。自分のやりたいと思うことを好きなようにすればいいのよ。わかる？　?? 貴女は自由なの！」

「でも、私」

「貴女は自分が何をしたいかわからないわけじゃないわ。わからないようにしていただだけよ。それが自分とお父さんへの裏切りになる
と思っていたから」

「ベーラ……」

「けどもう、気にしなくていいの。貴女は貴女の好きにすればいい」

フェリアはまだ父の手紙を読んでいないゆえに、その内容はわからなかったが、ベーラが言うからにはそういうことなのだろう。父はもう二度と、フェリアの元へは戻ってこない。フェリアは父を待つ必要がない。

「早く行きなさい！　今を逃したら、もう会う機会なんて二度とな

いと思いなさい」

一瞬逡巡したが、それはものの数秒のことで、気付けば手紙を握り駆け出していた。その背中にベーラの叱咤の声が届く。意味を聞き取ることとはできなかったが、おおよそ予想はついた。フェリアは心の中で謝礼を述べて劇場を飛び出した。

一人場内に取り残されたベーラは、「世話の焼ける親友だこと」と呟いた。滅多に他人の事に首を突っ込まない彼女が、睡眠時間を削って、座長代理だなんて面倒な役割を買って出てまで働いたのは、他でもない親友のことだからだ。

しかしいくら情報通で聡明なベーラにも、これ以上彼女のために何かをしてやることはできなかった。

答えは他の誰でもない、フェリアが自分で出すものだ。

11、歌姫の力

自室へ戻るなりコートを掴んだフェリアは、父からの手紙は机上に放置して、朝の静けさに包まれた町並みの中を走り抜けた。前方に聳え立つ城の後ろからゆっくりと朝日が昇ってくる。その幻想的な光景に目を奪われる暇すらなく、彼女は走った。朝露に濡れた石の道は舗装されているとは言え走りにくい。幾度も転倒しそうになりながらも、疲れきった足を励まして、フェリアは歓楽街の入り口を目指した。

視界に映る城がだんだんと大きさを増していく。その後ろに輝く金色の光も、空へ空へと昇っていく。朝の空気は冷たく、頬を刺すようだ。そしてようやく目的の酒場が見えてくると、その戸の周辺に軍服を着た男が幾人もたむろしているのがわかった。丁度、宴の終わったところなのだろう。

艶やかな色をなす歓楽街も、此処までくると落ち着いてくる。此処から続く道は王宮へと繋がっているためだ。今はほとんど力を持たないとは言っても、王家の荘厳さはこの道にしっかり残されていた。丁度この辺りはその境目である。

フェリアは、すでに消火されたガス灯の足に片手を付くと、息を切らした。無我夢中で走り続けたため、軽く眩暈がする。目を開くことも億劫であったが、なんとしてでも一様な軍服の中から彼を見つけ出そうと顔を上げた。

「准、尉……」

激しい息切れの合間に吐き出される言葉は繋がらない。息をするたびに肺に進入してくる空気はあまりにも冷たくて、喉と胸を焼いた。だが、それに勝る痛みが彼女のことを急かし続けている。このまま会うこともできないうちに別れてしまったら、それこそ自分は彼のことを殺したいほどに憎むだろう。そうすることによって自分のことも散々傷つけるのだ。それだけは、避けたい。故に、叫ぶ。

「???オレーク・ナイザーっ!」

あらん限りの力を振り絞って大呼されたフルネームに、そこにいた軍人たちが一斉に振り返った。そうして彼らは、ようやくそこに佇む女の姿に気付いたらしい。瞠目している彼らの顔を見て、そういえば自分は寝巻きの上にコートを羽織っただけだったなと思い出した。髪の毛も絡まりあい、化粧だってまともにはしていない。こんな状況のプリマドンナを、彼らは想像したことだってなかったのだろう。

「プリマ……?」

だが、あられない姿を彼に見られるのはこれが初めてではなかった。ある意味では、彼には常にプリマドンナらしからぬ姿を見られていたように思う。だが、それこそがフェリアの本来の形貌なのだ。

「准尉……」

静まり返った軍人の輪の中から現れたその男は、いつも通り気取っていた。一晩中、杯を交わしていたのだろうに少しの乱れもない癖の茶髪に、揺らぐことない灰色がかった切れ長の瞳。ぴしっと着こなした軍服は、今にでも戦地に向かえそうなほど整っていた。しかし、その表情は平静ではない。突然現れたフェリアの姿に、少なからず仰天していた。

「ちょっと、話したいことがあるの。いいかしら?」

自分でも驚くくらい据わった声が出て、フェリアはほっと胸を撫で下ろした。彼の前でこれ以上動揺を見せたくはなかった。

「ああ……なら、少し移動するか」

ナイザーは興味深そうにこちらに視線を投げる軍人たちを睥睨し、フェリアの腕を取った。フェリアもこの時ばかりは反抗せずに大人しく従う。人目に晒されながらできるような話ではないと思われたし、もうこれきり二度と会えないかもしれない人の存在を、腕に確かに感じていたためだ。

彼女はいつかの大雨の日のように、力強くナイザーに腕を引かれ

ていた。彼は力の加減というものを知らないため、腕の血が止まるのではないかとすら思える。だが、それでいい。痛いくらいで丁度いい。寝不足で明瞭としない意識の中でも、彼の存在を刻むことができるから。

歓楽街から出たナイザーは、フェリアの腕を引いたまま王宮を右手に見て曲がった。石畳を踏みしめて軽い傾斜の道を登ると、朝日が目に染み込んで来る。そこは開けた丘になっていて、ラウグリアの国の城が一望できた。

創立三百年を迎えるという国城は、老年ならではの威厳を称えている。三百年もの間何があっても此処から動かず、都を見守り続けた国の主は、見る者を圧巻させた。

「すごい……」

思わず、太陽に照らされて輝くその様を見て感嘆が漏れたのは、心に少し余裕が出来たためかもしれない。鬱陶しそうな顔をされるかと思って隣にいる男を見上げたが、意外にも彼は満悦していた。

「あそこは、俺の故郷だ……西に行く前に一度はここから拝んでおこうと思っていてな」

「故郷……」

ああ、そういえばこの人は王宮の中で育ったのだな、と言われてから思い出した。

ずっと下町で育ってきたフェリアには、王宮が現実とはかけ離れた世界に見えた。故にその全貌をこうして眺めて感動したわけだが、その中で当然のように生活していた人物と肩を並べて話していると思うと不思議な感覚である。

本当なら出会うはずのなかった人とうこうして出会い、彼のためにプリマである立場も矜持も捨てて町を駆け抜けることになるなんて思いも寄らなかった。全てを憎んでいた気持ちはどこへやら、今は達観し、清清しさすら覚えていた。王宮を照らす金色の光のためか

もしれない。

「……スールイ公が、暗殺されたわ」

会って何を話せばいいのかと危惧していたフェリアであったが、言葉に窮することはなかった。まず口をついて出てきたのは決して穏やかではない話題であったが、それでも不穏な空気は流れない。この絶景を前にして、険悪な雰囲気を作ろうというのが無理なのだろう。

「ああ……暗殺されたな」

「貴方がやったのでしょうか」

「俺がこの国に届ける最後の仕事だ」

ナイザーはごまかすことさえしなかった。その顔には笑みが浮かんでいる。不思議とその笑みに飲み込まれそうになりながらも、フェリアは続けた。

「うちの後援者だったのよ」

「何、グロピウス座ならすぐに新しい買い手がつくさ」

「人一人殺して、あっさりしてるのね」

「軍人だからな」

「だから嫌いよ、軍人なんて」

「俺も嫌いだ。だからこれを国のための最後の仕事にしようと思ってるな」

ナイザーも定常通り、のんびりとした口調で答えた。内容は長閑に話すものでも何でもないのだが、一日の始まりを告げる光は、何もかもを浄化してしまう作用を持つのだろうか。

「……もう仕事はしないっていうこと？」

「この国のための、最後の仕事と言ったんだ。これからは、自分のための仕事をこなす」

「つまり、どういうこと……？」

「国の利害を考えるのは、今回の件で終わりということさ」

ナイザーは草むらの上に腰を下ろして、片足をまっすぐ伸ばした。彼の穏やかな眼差しに胸の奥が締まるような痛みを訴える。それを

ごまかそうとしてフェリアは胸の前できゅつと拳を握った。

「……スールイ公は、この国にとって邪魔な存在だったのね」

「邪魔というより、国の仇そのものだった。西と密通していたからな。そして、西エウリアとの戦争が激しくなる前に、エウリアへ逃げようとしていた。『力』を持つ歌姫を手土産にな」

?? 私と一緒に西国へ行く気はないか。

そう告げた公爵からは、強い意志を感じた。なにゆえ一介の歌手でしかないフェリアを強情に連れて行こうとしたのかその時は疑問に思いつつも深く考えたりはしなかったが、彼にとっては必要不可欠な要素がそこにあったのだろう。西国はこころウグリアよりも『力』という物を重要視するらしいから、フェリアの存在は貴重だったに相違ない。

「あいつが密通していることは確かだったが、確たる証拠がなかった」

「それで、私に掛け合ったのね」

「そういうことになる。正直、あの雨の日にまさか俺をつけてくるとは予想外だったし、面倒なことになったと思ったが、結果的に助かったよ」

「……別に助けたわけじゃないわ」

そりゃそうだ、と彼が軽快に笑う声を聞きながら、フェリアはそっぽを向いた。結局、彼には踊らされてばかりだ。それなのに四日前のように憎悪の生まれてこない胸のうちは、どうしてしまったのだろう。

「……准尉は、嘘ばかりね」

「うん……?」

「嘘は良くない、とか私には言うくせに、自分は本当のことを話さないなんてずるいわ」

「俺は嘘なんてついたか?」

「正直、とか、本当のことを話そう、とか前置きするくせに、私はその後で本当ことを知るのよ、いつでも」

「でも、嘘はついていない」

「そういうの、屁理屈っていうの。知らない？」

流し目に睨むと、ナイザーは低く笑った。そして観念したというふうに関掌をこちらに見せる。

「??わかった。最後だし、君の質問になんでも答えよう。嘘はつかない。それでいいか？」

諭されている子供のような気分になって、フェリアは一瞬眉をひそめたが、不平を言うのは諦めた。どの道自分は愚図っている子供のようなものだ。わざわざこんなところまで押しかけてきて、文句を言う権利などないはずなのだ。彼の態度の全てが気に入らないと思っていたが、そもそも彼は自分とは違う世界の住人だったと思えば、詮方ない。あの輝かしいばかりの宮で育った彼と自分とは元より価値観から何から違うのだ。それを認めてしまえば、それほど腹は立たないのだということをようやく理解できた。

それよりも「最後だし」という全ての終わりを連想させる言葉の方が気になったが、フェリアはこれにも目を瞑る。彼女はただ黙って頷いた。そして、恐る恐る口を開く。

「じゃあ、聞くけど……貴方、アンナに何をしたの？ アンナだけじゃないわ。私が貴方を追いかけたあの日、たくさんの女に会っていたでしょう？ あの時の全員が、准尉のことを忘れてるんだわ……」

アンナ以外の女には会ったこともなかったが、きっとアンナと同じ状態に違いないと確信していた。アンナがおかしくなったのはあの日以降だ。あの時彼が何かをしたのなら、他の女たちも同じ運命を辿ったと考えるのが妥当である。案の定、ナイザーは否定はしなかった。

「単に忘れてしまったただけだ、という可能性は？」

「あんたの名前すら覚えてないのよ。准尉が何かしたんじゃないかったら病気じゃない」

「俺が何かをしたと？」

「だってあの日、貴方は私に言ったわ。『お前は俺のことを忘れられない』って。それってつまり、私が『力』を持っていることにも関係してるってことじゃないの？」

早口でまくしたてると、なんだそこまで感づいているのかとナイザーは首をすくめた。

「あの日、俺の後をつけていたなら、俺が何をしたか覚えているんじゃないか？」

「たっくさんの女に、会ってたわ」

「会って、何をしていた」

「抱き合って……花を渡してた」

「それだ」

抱き合っていたことは別段関係がないらしい。ナイザーは僅かに苦笑した。

「あの花には、花の贈り主の記憶を飛ばす作用がある。いや、花そのものにあるというわけではないな。あの花には、そういう作用を込めてある」

「どうやって……？」

「お前と同じように、『力』を持った人間がいるということさ。この国では『力』のことは禁句であり最高機密だが、法律や政府の目の行き届かない地域では、極秘裏にやりとりされていたりするんだよ。大雨の日に、お前を連れて行った廃屋があったろう」

「ええ」

「あそこの親父は、そういった地下組織の情報屋をやってる」

フェリアは汚らしい廃屋の奥から姿を見せた老爺の姿を思い起した。一見ただの乞食にしか見えなかったが、言われてみれば只者ではない雰囲気をもし出していたような気もする。おそらく乞食風体を装っているのは、国家から身を護るためなのだろう。

「つまり、あの老人に聞いて、その『力』のこもった花束を作ってくれる人のところへ行ったということね。……でも、どうして、アンナたちの記憶をなくす必要があったの」

「彼女たちにはひどいことをしたと思っている。情報を得るために、騙していたも同然だからな。それに俺は、もう二度と、此処へは戻って来ない」

フェリアは思わず息を呑んだ。先刻から、幾度も彼は似たようなことをほのめかしている。そこから連想されるのは、ただ一つ。

「……貴方、死ぬ気なの？」

死と言う名の、終焉だ。

やけに彼の表情が穏やかなことも、口調の柔らかいことも、全てが終焉の前兆に思えた。フェリアの体に戦慄が走る。人の死を経験したことのないわけではなく、つい先日も世話になっていたスールイ公を亡くしたばかりだが、それでもこんなに胸の内がざわめいたりはしなかった。

「死……？」

だが、ナイザーは依然としてあっけらかんとしている。

「そうだな、オレーク・ナイザー准尉という男であれば、死ぬだろうな」

「どうして……」

「さっきも言ったじゃないか。俺はもう、この国のためには生きない。そのために俺は、西行きを引き受けたんだ」

理解できずにフェリアが首を傾げると、ナイザーは自分の隣の草むらを指した。隣に座れという指示らしい。大人しくフェリアがそれに従うと、彼はあぐらをかいて荘厳に光輝く自分の故郷を見つめた。

「俺は、ひどく狭い世界で生きてきた。あの世界にいた頃は、ラウグリアがこの世で一番強いのだと信じ、皇太子殿下の力により叶わないことなどないんだと思っていた。??だが、一步外に出てみれば、ラウグリアはひどくちっぽけだ。最強だと思っていた皇太子殿下がいかに脆いのかも知った。この国はいずれ滅ぶ。俺はそれを見たくないんだ」

「だから、西へ逃げるの……？」

「違うな。外から救いたいんだ、この国を」

「おかしいわ。さっきと言ってることが違うじゃない。もうこの国のためには生きないって言っていたわ」

「確かに、それだと少し矛盾しているな。なら、なんと言おうか……。もうこの国家のためには生きない。俺は、准尉という称号を捨てるとし、皇太子殿下の隣に寄り添った日々に縛られるのもやめる」

「縛られる……？」

「ああ、縛られていたんだ……。すぐにも国家を破壊してしまいたい衝動を抑えられたのは、その中央に殿下がおられるからだ。俺は、あの方の傍でずっと、あの方を支えたと誓ったのに、逃げ出してしまった……。それを悔いるだけの毎日だった……。だが」

ナイザーはちらとフェリアの方を見やった。純真な瞳が向けられて胸が高鳴るが、すぐに落ち着いていた。彼の瞳の中にはフェリアが映っていない。彼は、フェリアを通して、別の人を見ている。

「……ラウグリアの東の方の田舎で、とある女性に出会った」

「誰……？」

「かつては首都にもいたという、絶世の美女だ。昔は誰からも愛される踊り子だったとか」

聞き覚えのある台詞であった。フェリアは幾度となくそう形容される女性のことを聞いている。それはもう、うんざりするくらいに。

自分のことを見ながらこういった話をする連中が、自分を見ていないことをフェリアはよく承知していた。彼らの見ている女が誰であるかも、紛うことなくわかっている。

「彼女は、田舎の町でも細々と踊り子をしていたよ。その町の住民皆に愛されていた」

「まさか……。あの女には、愛される価値なんてないわ」

「いや、まるで女神のような女性だったよ。出会ったのは、東との国境の見張りで始めてその辺りを訪れた時だった。彼女は俺を見るなり、俺が思い悩んでいることを言い当てた。そして俺に一言『全

てを忘れない?』と」

遠くを見つめるような眼差しで、彼はその女のことを見ているのだろう。フェリアの胸の内がぐっと締め付けられる。自分を通して母親の影を見られるのはこれが初めてではないのに、こんなに歯がゆく思ったことはなかった。

「その時に、教わったんだ。あの白い花のことを」

「……白い花?」

「首都に、贈り主のことを忘れさせる花を作る職人がいる、と聞いた」

「それって」

「そう?? 俺が女たちに贈った花束のことだ。贈るとは言っても、相手から花束を手渡されればそれで全ては忘れられるという仕組みになっている。計画すれば、殿下から俺がその花束を受け取ること出来た。……だが、結局俺はそれをしなかった」

「どうして……」

「忘れたくなかったんだ。まだ、俺の殿下への償いは終わっていないから。せめてあと三年は殿下のため、国家のために身を粉にして働こうと、決意した。それこそが殿下のためになるのだと、あの頃は勘違いしていたんだ。それが三年前のことだ」

そのために誰を利用しようと傷つけようと恨まれようと、どうでもよかった、と彼は付け加えて目を瞑る。

「???だが、全員の記憶を失わせたのは、せめてもの罪償いのつもりだな」

「だったら、私の記憶も飛ばしてくれればよかったのに……」

あんなに誰かを憎んだことも、底知れぬ悲しみに埋まったことも、歯がゆい気持ちで自分が自分でなくなっていくのをただ傍観するしかできなかったことも、忘れてしまえば楽だった。恨みがましい目を向けると、珍しくナイザーは困惑した笑みを浮かべていた。彼にもこんな表情が出来るのだなと知ってフェリアは拍子抜けする。戸惑いの表情なんて、彼には最も似合わない。

「記憶を飛ばす花の効果は、大して強くない。ある程度の『力』の持ち主には利かないと、そう教えてくれたのも田舎で出会った女神だよ」

「……私の前であの女を女神だなんて言わないで。あの女は夫を捨てて娘を捨てて、私利私欲に走って逃げたのよ。豪族に囲われて、それで鼻を高くして……」

「プリマ」

「純粋な作曲家だったお父様を、誑かしたのよ。きっと嘲笑ってたに違いないわ。お父様の純粋な心を……！」

息巻くフェリアに、今度はナイザーが拍子抜けする番だった。彼はフェリアを落ち着けるように彼女の肩を撫でると、その目を覗き込んでくる。

「そう思われても仕方がない、と彼女は言っていたよ」

「いいわよ、別に。どうせ貴方は女神様の肩を持ちたいんでしょう」

「そう言われるとなんとも返し難いが、少なくとも彼女は夫を愛していたと言っておこう」

「あんたに何がわかるのよ。お父様は別れの言葉すら告げられず、ただ一つの花束だけを託されて……」

途中まで言いかけて、フェリアははっとした。一つの考えが頭を過ぎったのだ。そんな、まさか、と自分自身では否定するが、それで何もかも辻褄の合うような気がした。いくら誑かしたただけだったとは言え、花束を贈って姿を眩ますというのはいささか不自然だとは思っていたのだ。手向けのつもりなら、もっと豪勢な花を贈ってもよかっただろうし、それすらなくてもいいと思うほど興味がなかったのなら、花束を贈ったこと事態が不自然だ。

目を上げれば、それを肯定するようにナイザーが頷いていた。フェリアの想像したことを読み取ったらしい。

「そうでなければ、どうして彼女が記憶を消す花束の存在を知っていたんだ。??彼女は一度その花束を作ってもらったことがあった

んだよ。自分の夫に、自分のことを忘れてもらおうと」

「……でも、それは自分が豪族に囲われる時に面倒を起こされたくないからじゃ……」

「まさか。もし贅沢な暮らしがしたくて豪族に囲われたのなら、いつまでもその男の下にいただろう。だが、俺が会った時、彼女は豪族のもとから抜け出して、目立たぬ田舎の村で貧しくも幸せそうに過ごしていた」

「じゃあ、どうして……」

「その豪族の名だが、俺も王宮内にいる時に幾度か聞いたことがあったよ。都で気に入った女を見つけては次々に囲い、そのためならどんな汚い手でも使う輩だ。まあ、国家に対してあくどいことをしているわけではなかったから、罰されることはなかったがな」

「じゃあ、無理やりだった……?」

「言うことを聞かないとどうされるかわからない状況だったには違いない。どうしようもなくなって自害した女もいたというくらいだから……だが、彼女はそうしなかった。かわりに、夫の中に住む自分を殺そうとしたんだ」

「でも、お父様はあの女のことを決して忘れてなんか、なかったわ……!」

「つまり、君の父上にも『力』があったんだろう。君と同じように」

「嘘……! そんな話聞いたことがない……」

「本人も気付いていない場合は多いぞ。少し人より得意なことがあったところで、それが特殊能力によるものだなんて思わないだろう。??君がそうだったように」

そんな、と口の中で呟いて、フェリアは宿舍の机の上に放置してきた父からの手紙を思った。まだ目を通していないそこには、何が書かれているのだろう。それを考えると、背筋が寒くなった。父はあれほど愛した女の心を知っていたのだろうか。それとも結局悲しみに明け暮れたままだったのだろうか。

「だから、そんなに母を恨むものじゃない」

そう呟いたナイザーは、フェリアの髪を撫でた。間近に見える整った顔立ちに、またもや涙腺が緩みそうになる。彼の目には今、母の姿が映っているのだろうか。これまでになんて幾度も「本当に母に似ている」という台詞は耳にした。そしてそのたびに、嫌悪したものだった。自分は憎らしいあの女に似ている自らの容姿を嫌悪していたのだとばかり思っていたが、それはほんの建前でしかなかったのだとフェリアはこの期に及んで思い知る。

「違うわ……」

本当のところは、そうではなかった。

フェリアは父を愛していた。その父の愛する母のことも、例え一度も見たことがなくとも、捨てられたのではないかと疑ったとしても、確かに愛していたのだ。恐らく心に根付いた嫌悪は、母を厭うものでもなければ自分の顔を憎むものでもない。

「本当は、憎んでいたんじゃない……本当は、とても羨ましかったのよ……」

人々は、フェリアの顔を見るたびに、母の面影を思い出して恍惚とした。誰も、フェリアのことなど見てはくれなかった。舞台を見に来た観客たちが、フェリアではなくグロピウス座のプリマを見に来たように。誰も、一人の人間としてのフェリアを見てはくれない。

そんな時に会ったナイザーは、一人特殊であった。舞台上で歌っているフェリアを、プリマドンナとしてのフェリアではなく、フェリアその人を貫くような眼差しを向けてくれた。だから、あんなにも奇妙に思ったのだ。そしてその感覚が歓喜だったと気付くのと同時に、彼はフェリアの母の面影を見ていたのだと知らされる。女神のようだったという、フェリアの母を、この男は見ていたのだ。

「私は、決してあの人を越えられない……。私の歌を聴きに来る人々だって、私が『力』を持っているから、聞きほれるわけでしょう？ 実力で、人々をひきつける女神様に、私は絶対に敵わない」

わなわなと震える唇を押さえ、熱くなった目頭を覆い、フェリアは俯いた。この感情の名前を、フェリアは知っている。今までずっとフェリアが醜いと思って蔑んできたものだ。例えばグロピウス座の先輩歌手たちは皆、フェリアにこの感情を向ける。??「嫉妬」というのだそうだ。誰かを羨み、妬んでいる。

「貴方も、私を見るたびにあの人のことを思い出すのでしょうか？」
醜い感情は覆い隠そうとしても、溢れていくばかりだ。なんという屈辱だろう。この屈辱を自覚しなくなって、フェリアは自分が母親のことを憎むよう仕向けた。それは無意識のうちに働く自己防衛だったのである。

「君には『力』がある。それは、実力があるということじゃないのか？」

宥めるような声とともに、顔を覆う両手に暖かい物が重ねられた。それが彼の手の平だと気付く前に、顔を解放させられる。相手を見たくないし、相手に見られたくなくて、フェリアは必死で顔を背けた。それを強情に向かせるようなことはしないが、声は続く。

「君の母親は、『力』を持っていなかった。だが、君は持っていた。そこで勝ったとは思わないのか？」

「思わないわよ。だって現に、准尉だって」

「俺は今、君を見ている」

奮然と言われて、思わずフェリアは顔を上げてしまった。情けない顔を見られたことへの後悔よりも、彼の毅然とした表情の方が印象強い。ナイザーはふと笑った。

「それは確かに、最初は君があの子の娘だと聞いて劇場を訪れた。だけれども、すぐに君の声にあてられてしまっただけ……。本当はスールイ公について調べて帰るつもりだったのに、一切できなかった。こんなことでは駄目だと思って、二度目からは殿下から授かった石を持つようにしたんだ」

ナイザーが自分の軍服の内側を示す。

そういえば、とフェリアは回想した。アンナの話によれば、フェ

リアが奇妙な客がいるとナイザーに気付く前に一度、彼はグロピウス座を訪れているということだった。それなのに、フェリアには一度目の彼の記憶がない。もしも客席の中にいたならば、あの居心地の悪いほどの視線に気付かないわけがないのに。

「母親と比べてどうする。『力』を持っているからなんなのだ。君は君らしく、堂々としていればいい」

ナイザーはそう言うと、フェリアから手を離れた。フェリアは必死に平常心を保ちながら、言葉を探す。まさかこの男から励ましを受けるなんて、夢にも思わなかった。

「……あんたにそんなことを言われると、なんか腹が立つわね」

「そうか。死にたいほどの屈辱か」

「馬鹿言わないで。殺したいほどの屈辱よ」

可愛気のない台詞しか思いつかないのは、今に始まったことではない。ナイザーも特に気にかけて様子はなく「そういえばお前に一度殺されそうになったな」と冗談では済まないことを言って笑った。その笑い声を聞いて、ようやく平常心を取り戻す。苛立ちはするけれども、それが心地よいのだ。フェリアが何を言おうとも、軽く受け流してくれる彼だから、フェリアは思いの丈を遠慮なくぶつけられる。

「でも、それなら、貴方は私のことを最初から知ってたってことよね？」

「ああ、そうだな」

「じゃあ、スールイ公のお屋敷で会った時、私のことを忘れてたのは……」

「当然演技だ。忘れるわけがないだろう。舞台が終わった後も俺のことをちらちらと見ているし」

あの時も気付いていたのか、とフェリアは苦りきった。もはや苦言を吐くことも労力の無駄としか思えない。

「……だったら、最初から私に近づけばよかったんじゃないの？ アンナとか、スールイのご息女に近づくより早く欲しい情報が得ら

れたでしように」

「だから何度も言っているじゃないか。できることならお前とは関わりたくなかったと」

「私が『力』を持っていて、記憶を抹消できないから？」

「それもある。が、一番大きな理由は俺があてられてしまうからだ」

「はあ？」

「だというのに、神様は悪戯ばかりなさる。何故だか君と二人きりになる状況が多くて、はつきり言って、参ったよ」

「なぜ？」

「二人きりになると、会話をしてしまうからさ」

目をぱちくりさせるフェリアの前に、彼は哄笑し、立ち上がった。ズボンについた草を払って、彼は腰に手を添える。聳え立つ王宮の後ろに、朝日はもういない。高く上っていった太陽は、涼しい北の地に温もりを与えていた。

「しかし、人間とは思議な物だな。一つ目的を果たすと次を果たしたい。一つ手に入れるともう一つ欲しい。実際にはこんなちっぽけな存在に何ができるわけもなく、何も持っていないのに。唯一あるとすれば、そうだな、自分の命だけだ」

「……何言ってるの？」

「俺は王宮の中で生まれ育ち、皇太子の世話役を仰せつかり、軍人にもなり、国中を旅して、そして今に至る。豊富な人生経験をしていると思うが、結局それで何を手に入れたのだろう。確かに俺の物だと思えるのは、自分の命だけだ」

「あんたの言ってること、さっぱりわからないわ」

「生きろってことだ。戦火はいずれ、首都にもやってくることだろう。だが、負けるな。お前には生きていてほしい」

「どうして」

「……珍しく殊勝になってやったんだから、理由なんて聞かずに頷いておけ」

「珍しいから気になるんじゃない。私が『力』を持っているから？
それとも女神様の娘だから？」

「……生きていればいずれまた会えるから、という選択肢はないのか」

「だって貴方はここに帰ってこないんでしょう？」

「それでも生きていれば、いずれ会うこともあるだろう。俺とて死ぬ気はない」

ナイザーは飄々と言ってのけてから、振り返った。

「これだけ正直に話したのだから、俺から君にも一つ、質問してもいいな？」

満足そうな微笑に、一瞬呆けてしまいそうになるが、フェリアは首を振った。自分に喝を入れて立ち上がると、「何」と問い返す。

「最後に、歌を歌ってくれないか」

予想外の質問にフェリアはぽかんとした。それにこれは質問というよりも、頼みではないか。

「でもだって貴方、『力』を防ぐ石を持っているんでしょう」

「今は持っていない」

「肌身離さず持っているものだと思ってた」

「今日は、特別だ。プリマに会うからな」

「私が会いに来たんじゃない」

「そうだったな」

要領を得ない会話を怪訝に思いこそしたが、やけにナイザーが嬉しそうにしているのを見て何もかもがどうでもよくなった。フェリアにとって歌うことは息をすることに等しい。別段、頼まれたりしなくとも、歌うこと自体に問題はなかった。

「まあ、歌ってやってもいいけれど……」

フェリアは丘の頂上に立って、コートの裾を揃えた。寝間着の上に直にコートを纏っているのだ。はしたない格好をしているという意識はあるが、それでも恥じることなく堂々と構えた。そしてまっすぐ、彼の切れ長の目を見据える。

「???これは、最後じゃないわ」

そう断ってから、フェリアはゆっくり瞼を伏せた。

太陽という天然のスポットライトを浴びて、草むらのステージに足を置いて。彼女の紡ぎだす歌は、父が残していったものだ。父の歌は娘の声となり、国中へと響き渡った。彼が何故、自分を裏切った愛というものをあれほど大切にしていたのか、今なら少し理解できる気がする。例えばどんなに痛めつけられても、彼は後悔などしていなかった。裏切られた分だけ、与えられるものはあったのだ。いや、それ以上に彼を幸せにしてくれていたはずだ。おそらく愛とはそういうものなのだ。辛い時には忘れてしまいがちだけれども、何物にも変えがたい幸せをもたらしてくれるものなのだ。

彼女の歌声に呼応するように、丘の上を風が駆け抜けた。フェリアの羽織る外套がなびき、羽のようにふわふわとはためく。その姿に何を見たのだろう、ナイザーは眩しげに目を細めた。その口が静かに「フェリア」と呼んだのを、彼女は歌いながらも聞き逃さない。初めてその声で自分の名が語られたことに、苦おしいほど感動した。

この苦しみの名は、今更言うまでもない。フェリアが自分には決して縁のないと思い、ずっと憎んでいたそれは、確かに彼女の中にも存在していた。

人に苦悶を与えるだけの感情ならばない方がいいに決まっているとずっと思っていた。

だが、何物にも変えがたい幸せを、フェリアは確かに今、感じている。

それはきつと、どんな『力』よりも心強い味方である。

フェリアは自分の『力』を歌に乗せて、彼に届けた。また次に会うその時まで、言葉として告白するのはとおこう。

終、手紙

『

愛しい我が娘　フェリア・パーチスへ

この手紙が貴女のもとへ辿り着くのがいつになるのか、果たしてそもそも貴女のもとへ辿り着くのかどうか、私には悲しいことにわかりません。どれだけ時間経てもいい、どうぞ貴女の元へ辿り着きますようにと父は願いをこめてペンを執っています。

父が軍隊に入り、貴女と別れ、いつのまにか四年もの月日が通り過ぎて行きました。貴女はもう十一の年となり、母によく似た綺麗な娘御にと成長していることでしょう。

私は一兵士となり、隊への命令を受け、東の国へと遠征に行くこととなりました。その遠征の途中、一つの小さな村で宿を取ることとなり、父はなんと母と再会を果たしたのです。

貴女の母は、思い出を裏切ることなく、それはそれは美しい踊り子でした。小さな村の中で、美しい踊りを披露しておりました。父との再会に愕然として、狂喜乱舞してくれました。娘のフェリアのいないことを大変嘆いておりました。どうかフェリアに会いに行つてやってほしいと伝えましたが、身売りされた自分を豪族の手から救ってくれたこの村への恩返しはまだ済んでいないからと、残念ながら村へ残ることを母は選びました。それでも、例えばどこにいても、貴女の幸せを祈り、そしてまた、貴女なら自分で幸せの道を拓けるだろうと毅然として言い放ちました。その姿はやはり女神のように美しく、かつての輝きを失ってはいませんでした。

それから私は母のいる村を離れ、東の国境を越えました。東国ヤ
ンムへの遠征です。この手紙も、東国の山奥にて書いています。今
宵は月もなく、化け物が姿を現さないため、今しかないと思ったの
です。

東国の山には、『獣人』と呼ばれる恐ろしい化け物が多々潜んで
います。かつては人であったといいますが、我々の出会う獣人はす
でに成長し、人であった頃の面影など少しもなく、人間を見つける
なり襲いかかってきます。彼らは人肉を食らいます。すでに幾人も
の同士が犠牲になりました。

我々の隊の任務は、この山を切り開き、後に続く遠征軍の道を作
ることです。すなわち、この獣人を全て排除しなくてはなりません。
しかし、獣人はとてつもなく凶暴で、頑強で、一筋縄にはいきませ
ん。彼らには鋼の刀も、固い石槍も、効かないのです。成長した獣
人は固い毛皮を持ち、炎にすら打ち勝つといえます。

恐らく、父が貴女の所へ戻ることはないでしょう。何一つ貴女に
残してやれなかった父を許してくれとは言いません。ただ一つ傲慢
が許されるのなら、貴女には自由に生きてほしいと思います。母の
ように踊り子として劇場に縛られるのではなく、父のように時代の惨
劇に飲み込まれるのではなく、何にも左右されない自由な人生を送っ
てほしい。これが私の最後の願いです。

貴女の歌声は、人を救います。

貴女の歌には力があります。

どうか、そのことを、忘れないで。

父 ラドレッサ・パーチス

夜の帳の下りる頃、舞台の幕が開く。

衣装に着替えて楽屋から出てきたベーラは、そこに親友の姿を見つけて目を丸くした。そろそろ、プリマがいらないという騒動が起こる頃だろうと思って身構えていただけに、呆気に取られてしまう。

「フェリア、なんであんなここにいるの」

「なんでって……そろそろ舞台が始まるじゃない」

突然の無作法な質問には、フェリアも驚いたようだった。何を言っているんだと訝るようにベーラを睨みつけてくるので、戸惑う。しかしもともと表情の乏しいベーラは、困惑していてもそれが相手に伝わりにくいという。長年良き友人を続けているフェリアですら、時折何を考えているのかわからないと口にするほどだった。

「……でも、あんな、お父さまからの手紙、読んだんでしょ？」

「読んだけど……」

「じゃあなんでここにいるの」

やはりベーラの戸惑いは通じていない。それどころかフェリアの方が困ったように頭に手をやって、セットされた髪型を崩すまいとすぐに離れた。

「読んだからってどうして此処にいちやいけないのか、私にはそっちの方がわからないわ」

フェリアは衣装の皺を伸ばし、大きく腕を回してストレッチをすると舞台の方に意識を集中させる。幕を挟んで向こう側から人々のざわめきが聞こえた。スールイ公の後ろ盾をなくしたとは言え、客入り状況は変わらない。今宵も満席のようだ。フェリアにつられてベーラも舞台の方を窺うと、しばし考えこんだ。

フェリアはもう戻ってこないに違いないとベーラは思っていた。ナイザーとどのように話をつけるにしろ、前に進むべきだと思っていたからだ。フェリアには悪い思いながらも、ベーラは中身を確

認するためフェリアの父ラドレッサの手紙を一読していた。故にその内容も知っている。

フェリアがこの劇団の中に残っているのは、いつか父親が戻ってくることを信じているからだとベーラは解釈していた。ならば、父からこのような手紙が来た時点でその動機は消えてしまう。自由の身になったフェリアなら、例えばナイザーという男とともに旅立つことも、東の方向にいるという母を捜しに行くことも、父の亡骸を探しに東の国へ行くことも出来よう。今更何のためらう必要はないのである。

「なのに、どうして」

「え？」

フェリアの綺麗な青の瞳がこちらを向いた。ベーラは客席に声が響くことのないよう配慮して彼女に近付き、口を開く。

「……まず最初に、グロピウスの弁護をしとくわ」

時折フェリアは、ベーラの話は唐突すぎると失笑するが、それは由縁あったことである。だが、ベーラはいつだって、脈絡がありきちんと筋の通った話をしているつもりであった。

「ずっと貴女に手紙を隠していたことだけど……たぶん、グロピウスは、貴女に父親の死を伝えたくなかったのよ。その手紙が届いたのは、貴女がまだ十一かそこらのことでしょう？ 自由に生きると言われたところでこの劇団の他に居場所もなかった貴女に、此処に居座らせる動機を持たせ続けてくれたんだと思うの」

「それは……私もそう思ってるわ」

他人には理解しがたい突飛な話題の振り方でも、フェリアには慣れたものである。きちんとベーラに付いてきて、声を潜めて頷いた。

「グロピウスはお父様の代わりに、私のことを本当の娘みたいに可愛がってくれたわ。それは重々わかってる」

「なら、いいわ……。でもフェリア、もう貴女は子供じゃないのよ。自分の好きなように生きていいし、貴女にはそうできるだけの力が

ある」

「力……」

「そうよ、力よ。こんな小さな劇場で、こんな狭い世界に縛られて生きていく必要なんて、ないんだから」

力という単語がフェリアに与える影響を、ベーラは知らない。それでも彼女に力があるとベーラは言い張った。

フェリアはしばらく、何かを考え込んだようだった。こちらとは視線を合わせず、やがて呟いた声は細くとも、決して弱弱しくはない。

「そうね……私には、力があるの」

「そうよ、だから」

「でも、まだそれを使う時は来ていないわ」

正々堂々と言い放たれて、ベーラは言葉を飲み込んだ。自慢ではないが、フェリアとの会話で彼女に言い負かされたことは滅多になり。そのはずなのに、どうしたことだろう。一瞬で言葉を見失ってしまった。

「使う時……?」

なんとか反芻だけすると、フェリアは自信満々に頷く。

「私はその時まで、生き続けなきゃいけない。だから、ここで待つわ。その時を……」

「フェリア……」

彼女は満面に微笑みを称えていた。少しの迷いもなく、何かを決めたように笑顔をふりまいて、衣装を翻す。

客席から拍手が上がった。幕開きの合図だ。

「だ、だけど、フェリア!」

このまま言い負かされてたまるかと慌てて前に行くプリマの肩を叩くと、彼女は簡単に足を止める。そして振り返った花のかんばせには、心底不可解そうな色が浮かんでいた。

「……じゃあ、聞けどベーラ。あんたは、私に此处にいて欲しいの? 欲しくないの?」

「私……?」

オーケストラの奏でる音に、会場が包まれる。照明に照らされ、ダンサーたちの衣装が幾重にも反射した。白に近い色彩が舞台裏の二人の下まで届く。

まさか逆に問い返されるとは思っていなかったため、気の利いた返答は一つも用意していない。

「私は……いて欲しいわ」

ゆえに仕方なく、本心を語った。

ベーラがフェリアと出会ったのは、今から十数年前のことだ。孤児であり、最も古い記憶にもこの劇場しかないベーラにとっては、初めて対等に話せる友人であった。自分より三つ年下であり立場は後輩であったが、ベーラにとっては何より大切な親友だった。ゆえに、どんなことをしても幸せになって欲しいと願った。けれども、それはフェリアにどこかへ行ってしまうって欲しいということではない。

「私は、あんたに此処にいてほしいわよ……」

「ベーラ」

「……だって、そうじゃないと、他のダンサーとか歌手の妬みが、全部私一人に向くじゃない?」

せめてものの反撃、茶目っ気たっぷりに片目を瞑ってみせると、フェリアの青い瞳が丸く開かれた。やがてそれはいつも二人の間で交わされる冗談を受け止める形に歪んで、くすくすと笑い声が漏れる。

「そうね、私たちここの看板だものね」

「その通り。……いいわ、今回は私の負け。好きなだけここにいなさいよ」

「言われなくとも」

序幕の踊りが終わった。フェリアが舞台上を示し、ベーラも頷く。此処からはプリマドンナの出番だ。

歩武堂々と進んでいくその姿には、誰にも負けない凛々しさがあ

る。他の歌手たちはもちろん、彼女の母にだって劣らない。それこそが彼女の生まれ持った力である。

???少女の父親は、線の細い作曲家であった。特殊な才能の持ち主であり、この世の全てを音に変えた。その力は娘にも引き継がれている。

???少女の母親は華々しい踊り子であった。優美な輝きの中に人を愛する心を持ち、今もそれは娘へと届けられている。

国中で知らぬ者はいないとまで言われた伝説の歌姫は、今日も歌い続ける。世界が例え火に焼かれようとも、胸に抱いた希望を世界へと発信していく。

彼女は、時を待つ。いずれ彼女の力が世界に必要とされるその日まで、彼女は待ち続けるのだ。彼女の歌声が国境を越えて全世界へ羽ばたく時、天地は姿を変えることだろう。

???そして、その時はすぐそこまで迫っていた。

「北国のプリマ」完??

終、手紙（後書き）

ご感想など頂ければ嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8908x/>

北国のプリマ

2011年10月27日07時13分発行